
Soap Dish

シトラチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Soap Dish

【Nコード】

N1105V

【作者名】

シトラチネ

【あらすじ】

人間にうといアンティークな僕は、彼女と初めて「目が合った」

運命を感じちゃった彼女に尽くすソープ・ディッシュの、ほのぼの純愛ファンタジー。『Episode in Aurore et Crepuscule』は『Soap Dish』各話とリンクしたこぼれ話たち。ショップの孫息子ルイは辛口で、アンティークには興味なし。だけどそれなりにモノと女に一言あるのです。

『Soap Dish』と雰囲気違ってシニカルなのでご注意。

）『Episode in Aurore et Crepusc

u1e』のルイには続編『Mile Zero』を掲載予定（以前、別サイトにて掲載していたものをサイト閉鎖により移植）（以

1・運命のリボン

目が合ってしまった。

ということは男性にもままあることだが、女性の場合はやたらと頻発するらしい。時には無理矢理そういうことにしたりするらしい。僕にはそれまで、この「目が合う」経験がなかった。

物理的に目が合うのと何がどう違うのか。そう問うてみたところ、隣にいた大先輩が答えてくれた。

特に好みでもないのに背を向けられなくなる、呼ばれている感じがする、今を逃したらもう二度とめぐり合えない気がする、そんな感覚らしい。

「それはね、わたしたちにとって、この上なく幸せなことよ。神さまが目に見えない運命のリボンを、ひらひらと振って教えて下さる瞬間なの」

大先輩は、誰もがその瞬間の光臨にあずかれるように、世の中はできているのだと言った。

僕は半信半疑でいたけれど、大先輩のおっしゃることだ。敬意を込めて、その時を楽しみに待ちますと返した。

ガラス越しの柔らかな日差しを眺めながら交わしたあの会話、あれはこの街角だったのか。今はすでに、温かな黄昏色の思い出の中にしかないどこかだ。

もしも一度あの先輩と会えることがあるのなら、僕はこう伝えたい。

あなたは僕が知らなかった希望と幸福を、まっさらなりボンの端を、僕に結んでくださったのです。

「おはようございます」

初めて僕が声に出してそう挨拶したとき、彼女は一旦首をかしげ、黙ってその場を離れた。しばらくしたら戻ってきてくれたので、また挨拶した。

彼女はへたり込んだ。

驚かせてしまったようだ。言葉をかけるときは相手を選んで慎重に、そう習った。彼女はこうした事情に詳しくそうだったし、三日ほど様子も見た。だけど三日じゃ足りなかったようだ。

「もう少し時間を置くべきでしたね。お詫びします」

あんぐりと口を開けて、という表現は今の彼女のためにあるに違いない。表情が豊かというのは便利なものだ。

「あなたにはまず、お礼を申し上げねばなりません。僕を選んでくださってありがとうございます。あなたはこう言ってくれましたね。目が合ってしまったから、どうしても連れて帰りたくなっただんです、と」

彼女のあんぐりが、あんぐ程度に縮小した。

「僕も、あなたとは目が合ったと思えました。あなたの手が触れてくれるように祈りながら、見つめ返し続けたんです。そう、視線というリボンで、運命のリボンも一緒に結ぼうとして」

後ろの壁に背を貼りつけたまま、彼女はじりじりと立ち上がろうとしている。せっけんが滑るコトンという音だけで、雷より速く逃げ出しそうだ。

「あの、もしかして僕が分からない……?」

「もしかしなくなつて、分かるわけないでしょう!」

運命のリボンを結んだつもりだった相手に、そう悲痛に叫ばれてしまった。クリスマス・イヴの朝、神さまは忙しくて、僕にまで手が回らなかつたようだ。

「失礼しました、最初に名乗るべきでしたね。僕は三日前、あなたがアンティーク・ショップでお買い上げになったソーブ・ディッシュです」

「確かに三日前、わたしはアンティーク・ショップでせっけん置きを買った。フランス製の、真鍮の。けどどしゃべるせっけん置きだなんて聞いてない！」

店主との話ではよくシヨップに来ていたようなのに、彼女はこういう事情にまでは通じていなかったらしい。これは僕の早とちり。

「ドールには魂が宿るとか、呪われたアクセサリーとか、耳にしたことありませんか？　ここ日本でも、付喪神として知られているそうではないですか。齢百年にして器物に霊宿る、と」

「オツケー、落ち着いて。……つまり、せっけん置きの神さまなのね？」

怯えたような彼女の瞳が僕を悲しくさせる。シヨップで僕を手にとってくれたときの、きらきらと輝いて覗き込んでいた黒真珠の瞳とはまるで違ったから。

リボンの魔法は三日のあいだに解けてしまったのだろうか。

「年月を重ねて話せるようになったソープ・ディッシュユとってください」

「分かった。それで、しゃべるせっけん置きさん。何が望みなのか？　なぜだろう。分かったと言う割には、警戒度が上昇しているように見受けられる。彼女の瞳が跳ね返す光は、まるで味気ないステンレス板だ。」

「わざわざしゃべりだしたってことは、何か目的があるんでしょう？　故郷に帰って欲しいとか、本来の持ち主へ送ってくれとか」

「そんな。僕はただ、挨拶をしたかっただけです」
人間という生き物よりも壊れにくい僕たちは、壊れてしまうその日まで、数々の手を経て流れていくものだ。帰りたい故郷があるわけでも、送ってもらいたい誰かがいるわけでもない。

それでも相性というものはある。日々使ってもらえることもあれば、しまいこまれたり、箱に飾られたり、愛情の注がれ方には何通りもあって、それがこちらの望みと合致するとは限らない。

アンティーク・ショップは、いやすべての市場というものは、人間の手とモノの手が、握って心地よい相手を探して行き交う場所なのだ。その相手を見つけた瞬間が「目が合う」ときなのだ。

目が合った彼女は運命の相手なのだから、挨拶して喜ばれることはあってもまさか、目的は何だと問われてしまうとは。

「目が合う」感覚を覚えてくれた大先輩、どこかの街角のショップで隣に陳列されていた十九世紀のブローチさんはもういない。

こんな時どうすればいいのかわっている先輩付喪神はいまいかと見回したけれど、彼女のバスルームに僕よりアンティークなモノはないようだ。

僕は最近ようやく意識の生まれた新米精霊。その僕が一番の古株では、ここには指南を請える相手がいるはずもない。

「挨拶って……要するによろしく、ってこと？」

幸いにも、彼女はようやく僕の意図を察してくれたようだ。

「そうです。毎朝おはようございますと行ってらっしゃいを言って、毎晩おかえりなさいとおやすみなさいを言って、僕はあなたのため

にせっけんを最高の状態で保ちます。いつもあなたが気分よく、せっけんを使えるように」

「……それだけ？」

僕は衝撃のあまり、せっけんを引っくり返してしまふかと思っただけ。せっけんを美しく保つこと、それがソープ・ディッシュの使命、誇り。ソープ・ディッシュはそのために存在する。

だから僕は、僕を飾りに置いておくだけの持ち主には満足できなかった。買った当日にプロヴァンス産のせっけんを据え、毎朝毎晩、その花の香りを楽しみながら気持ちよさそうに顔を洗ってくれる彼女を、どれほど幸せな思いで見つめていることか。

そのせっけんが水に濡れたままぶにやぶにやにぬめってしまうの

を防いでいるのは、他ならぬこの僕なのに。

「それだけ、だなんて……僕にはそれ以外できません。それ以外ではお役に立てません。これ以上僕に一体、何をお望みですか？」

「そうね……おしゃべり、とか」

「え？」

僕の悲嘆とは裏腹に、彼女はあごに人差し指をあてて、ちよつと笑っていた。

「わたし、独り暮らしでしょ。友達以上の人はいるけど、クリスマスは仕事で忙しいって会ってもくれない。だから自分で自分にクリスマス・プレゼントを買ったの、それがキミ」

真鍮のソープ・ディッシュに心臓なんてありはしないのに、それが跳ねるといふ人間の感覚が分かるような、わくわくと落ち着かない気持ちになり始める。

「シャンパンとケーキを一人でやけ食いしなくてすみそう。キミ、色々と楽しい話を知っていそうだもん。さっき言ってた、呪われたアクセサリーとか」

「ええ、それは、アンティークですからそれなりに」

「うわ、楽しみ！ じゃあ早速テーブルに移動、移動」

彼女はラヴェンダーのせっけんをどかすと、両手で僕を持ち上げようとした。

「あっ、待ってください！」
「なに？」

ものすごく、ものすごく至近距離に彼女の瞳。僕の真鍮の身体に黒真珠が映って、僕はとても幸せな気分になる。

「夜中、しっかり水切りしておいたんです、せっけん使ってください。洗顔、まだでしょう？ それに僕はソープ・ディッシュです。

テーブルもいいのですが、きちんとせっけんを置いて、おしゃべり

……が終わったら、バスルームに戻してください」

彼女がぱちくり、と瞬きをすると、僕の真鍮に映る黒真珠も連動した。くすぐつたいというのは、こうして嬉しさがさざなみのように打ち寄せることを言うのに違いない。

「そっか。うん、分かった。せっけん置きなんだもんね」

「はい。それから」

まだ、何か？ と問われているのが、彼女のけげんそうな眉で読むことができた。表情とはすばらしい。まだ顔を持たない僕はこうして言葉にしないと、何一つ伝えられないというのに。

だから僕は精一杯、運命のリボンの端をひらひらと、その先が結ばれているはずの彼女に向かって振るのだ。

それは神さまにしか見えないけれど、感じることはできるから。

「これから、よろしく願います」

2・名前がないのは

慣れないダイニングテーブルの上で。僕はキッチンとの往復を繰り返す彼女を、忠実に視線で追っていた。バスルームを住処とするソープ・ディッシュにとっては、そうそうお目にかかれる光景じゃないから。

彼女がテーブルに近づくと、僕の真鍮の身体に黒髪が映りこむ。オニキスみたいにとこまでも深黒で、朝の日差しを柔らかく丸めて輝いてる。

冷たいとも言われがちな真鍮の光が、彼女によって中和されるよう。

カフェオレボウルにクロワッサンをのせた皿、陶器でできたにわたりのエッグスタンド。ランチョンマットに手際よく、そして楽しそうに、並べるといふよりは展示するように、彼女は朝食を置いていく。

「フランス製のキミと食べるんだから、フランスっぽくね。ふふ、実はさつきまで、食欲なんて全然なかったんだけど」

人間にとって基本となるのは衣食住というものだそうで、よってアンティークにもそれに関係した品が圧倒的に多い。僕は住に属するのだけれど、食にまで関わることになるとは思わなかった。

精霊となると、いや彼女といると、驚かされることばかり。

「ねえ、キミ。名前考えようか。しゃべるせつけん皿くん、じゃ、まだるっこしいもの」

もし人間の身体を持っていたら、僕はのけぞったことだろう。

名前。彼女が意味しているのは固有名詞のことだ。造られてこのかた、僕はそんなものとさっぱり縁がなかった。

「そうですね……その前にあなたは、呪われたアクセサリーの話をご所望でしたね？」

僕に名前をつけたいと言う彼女に、どうかうまく伝わりますよう

に。

ホープダイヤをご存知でしょうか。

訊ねてみると彼女はクロワツサンをかじりながら、聞き覚えがあるようなないような、と曖昧な返事をした。

タイタニックという映画で、ヒロインが碧洋のハートと呼ばれる宝石を身に着けていたそうですね。そのモデルとなったブルーダイヤです、と加えると、ぱつと笑顔になった。

女性というものはつくづく、宝石がお好きなようだ。僕にとってはブルーダイヤより彼女のほうが、よっぽど見飽きないというのに。ホープダイヤは所有者や身に着けた者に災いをもたらすという噂で、呪いのブルーダイヤと言われる。マリー・アントワネット、ホープダイヤの名の由来となった実業家ホープ、マリリン・モンロー、その犠牲者は枚挙に暇がない。

「アンティークの世界で固有名詞を持つということは、いわくつきであるということなんです」

カフェオレをすすりながら、彼女はうーんと唸った。

レディは肘をついてカップをすすったりしてはいけないものらしいのだけれど、見なかったことにする。きつとこれが、目をつぶると表現されるマナーなのだ。

「でもアンティークって、そのいわくつきが面白いんじゃない？」

「前の所有者の名を冠する品物が嬉しいのですか？ たとえばもしあなたの……恋人の男性に、以前付き合っていた女性の名前がくっついていたらどう思われるでしょう。マリーの恋人だったピエール、みたいに」

彼女の下唇が、いーつと歪んだ。

「いや。それはいや」

「僕はいわくも何も無い、ただのソーブ・ディッシュです。あなた

には、キミと呼びかけられれば通じます。名前など取り立てて必要ありませんよね？」

ピンポンというその音は、来客を知らせるノック代わりのものらしい。

そうよね、名前なんて要らないわね、と彼女が頷いてくれたところだというのに、無粋なタイミングだ。

「えーっ、どうしたの。仕事で会えないって言ってたじゃない」

「これから出張なだけどさ。予定の新幹線の前に、ちょっと時間あったから」

彼女のものとは違う、どすどすと上品さを知らない足音。そして男性の声が近づいてくる。

「はい、プレゼント」

「わあ、ありがとう」

真鍮は放置されると黒ずんでくる。僕は一瞬にして十年の時が経つたみたいに、世界が真っ黒になった気がした。

彼女は、自分へのクリスマス・プレゼントに僕を選んだと言ってくれたのに。

桜貝の色に頬を染めて、彼女は嬉しそうに包みを解いている。手というものがあれば僕は彼女の頬を両手で挟んで、黒真珠の瞳をこちらに向かせるだろう。

「メリー・クリスマス、アスリ」

耐腐食性を誇る真鍮だけど、僕は水に浸かったままのせっけんみたいに、ぐずぐずに崩れてしまうかと思った。

僕の名前は不要だと言った。でも彼女に名前があるのなら、それは彼女から聞きたかった。

見ず知らずの男性が彼女に祝福を与える、その言葉を盗み聞きするような、こんな形で知りたくはなかった。

「ソープ・ディスプレイ？」

「そう。小物入れとセットで。おまえ好きだろ、こういう陶器とか」
僕はもう、僕はもう、たぎる釜に身投げしてとろけてしまおうか
と思った。

話に聞いたことがある、液体せっけん。固形せっけんに代わって
広まっでいて、それを保つためには僕のようなソープ・ディッシュ
でなく、ソープ・ディスプレイというものを使うのだそうだ。

よりによって彼女は、恋人からのクリスマス・プレゼントに、ソ
ープ・ディスプレイを受け取ったのだ。

僕は用無しになった。

かたかたと振動音がして、若い男性があたりを見回す。

「あれ？ 地震？」

「揺れてないけど……あ」

彼女が僕を見た。やっと僕を見てくれた。

そのときようやく、かたかたというのが、僕の小さな足がテーブ
ルにぶつかる音だと知った。

「ヤバ、時間ないんだ。もう行くよ」

おろおろと、恋人からのプレゼントと僕とを交互に見回す彼女に、
男性は気付きもしない。僕だったら彼女を見つめ続けて、その一拳
手一投足を逃さない。だけど、それももう終わり。

ばたばたと慌しく男性は帰っていく。玄関のドアが閉まり彼女が
駆け戻ってくるまで、僕はずっとかたかたと震えていた。

彼女はテーブルに両手をついて、思いつきり近くまで鼻を寄せて
きた。

「せっけん皿くん、怒ってる？」

「いいえ」

それは本当だった。

どう言えばいいのか、自分にもその正体が分からぬものを、どう伝えればいいというのか。

僕は今日を限りに彼女のせっけんを預かることはないのかと思うと、中央からめきりと折れてしまいそうに身体が痛んだ。

これまで僕は、数々の手を経てきた。それまでの所有者の手を離れるとき、さびしさは感じてても、こんな痛みはなかった。それがモノとして当然の処遇だと思っていた。

なのにこの瞬間、潰されそうに苦しいのはなぜだろう。彼女とは「目が合った」からだろうか。

いま僕の運命のリボンを振ったら、その先はどこにも続かない、はたはたと虚しい感触がするのだろうか。とてもそれを確認してみる勇氣など湧いてこない。

「あのね、あの人、わたしが敏感肌だつてまだ知らないの。液体せっけんはすぐに手荒れしちゃうから、使わないの」

ソープ・ディッシュである僕はその特性上、せっけんについて少しは知っている。

彼女が使うプロヴァンス産のせっけんは天然素材のみが使われていて、とても優しい。そのぶんデリケートで、水切りをするソープ・ディッシュは必需品なのだ。

「だからソープ・ディスプレイはいらないの。でも彼には内緒」
その言葉を証明してみせるように、彼女は陶器のソープ・ディスプレイを箱に戻した。それからにっこりと笑ってくれる。

ああ、せっけんより大粒のダイヤだつてきつと、彼女の笑みほど眩しくは輝けない。

「わたしのせっけんをお願いするのは、キミだけだからね」
「はい」

いつの間にか、かたかたという音も震えも止まっていた。それどころかテーブルの存在が分からず、まるでせっけんの泡のようにふわふわと、身体が浮き始めた気がした。

重量のある真鍮なんだから、そんなはずはない。だけどうした

って、そんな感じなのだ。

「任せてください」

僕が張り切ったところで、せっけんの水切りが早くなるわけでも、せっけんの質が良くなるわけでもない。それでも僕は張り切って、彼女の肌を傷めない彼女の特別なせっけんを、もう一度しっかりとホールドした。

神さま、あなたには名前がない。それはあなたが唯一絶対の存在だからです。

僕にも名前がない。それがいわくつきでないからではなく、どうか、彼女にとって唯一だからでありますように。

3・Grandfather's Clock

ふんふんふん、と半透明のドアの向こうから、シャワーの水音と一緒に彼女の鼻歌が聴こえてくる。

人間は気分がいいとそうするものなんだそうだ。だから僕は彼女の鼻歌が聴こえてくると、じいっとそれに集中する。耳を傾ける、と言われるらしい動作。彼女が気分よく歌う歌はきつと、彼女の好きな歌だから。

アンティーク・ショップという場所は無音か、とても控えめにクラシックがかかっているものだ。おかげで僕も少しは音楽を知っている。だけど彼女が口ずさむのは僕の知らない歌ばかりで、その度にながかりしたり焦ったりしてしまう。

僕が彼女について詳しいのはまだ、せっけんの好みくらい。音楽はやっと見つけた共通の話題の糸口なのだ。

だから初めて既知のメロディをキャッチした時、僕はここぞとばかりに唱和した。

「わあ、せっけん受けくんが歌ってる。歌ってしゃべれるせっけん受けなんだね」

身体にバスタオルを巻いた彼女が出てきて、ご機嫌に弾む声で喜んでくれた。声がかれるということのない僕は、請われるままに歌い続ける。

突然、彼女がくしゃみをした。
「ごめんなさい。お風呂を出てすぐに服を着ないと、風邪になるんです」

壊れる限り失われることのないモノ、それもアンティークともなると、つい時間の経過というものが人間と違う事実を忘れがちになる。

だから持ち主と共に時を刻み、時を終わった時計の歌　このGrandfather's Clockは、僕の心を聖歌よりも優

しく震わせる。

モノは人から人へと渡り歩くのが当然だと思っていた僕なのに、今はこの時計に憧れを抱き始めてる。これは新たなる変化だ。

アンティークは歳月による渋みと味わい、時に褪せさえも増すことは容認されても、新しい変化というものは歓迎されない。時が止まったように造られたままであること、それがアンティークの醍醐味なのだと言おう。

彼女と出会ってからの僕は毎日のように新たな変化を受け入れていて、アンティークとしてはあるまじき姿になってしまったかもしれない。

だけど僕は気にしない。僕の価値は僕でなく、他人でなく、彼女が決めるものだから。所有者たる彼女が喜んでくれるなら、僕はアンティークとしての価値など惜しげなく手放そう。

「ねえ、さっき歌ってたのって、『大きな古時計』の英語の歌詞よね」

着替えてきた彼女が言う。彼女は日本語で歌っていたつもりらしいが、鼻歌だったから気づかなかった。

日本語の歌詞を聞かせてくださいとお願いしたのは、本当にそれを知りたかったからというより、彼女の歌声が降り注ぐ恩寵を感じていたかったからなのだけだ。

「原詩と少し違うんですね。おじいさんは百歳じゃなくて、九十歳なんです」

「へえ、そうなの！ 物知りねー、さすがアンティーク」

アンティークとしての知識を買ってもらえるなら、僕はずっとアンティークでいよう。

「二番でおじいさんに花嫁が来たとき、時計は嬉しくってつい二十四回も鐘を鳴らしちゃったんです」

「あはは、ありえないのにね！ 可愛い」

僕がその時計だったら、彼女が花婿を連れてきた瞬間に永遠に止まっちゃうかもしれない。

「それから原詩の三番が邦訳では省かれてしまってます。とてもいいところなのに、残念です」

「どんな歌詞？」

「ええとですね」

いざ問われると恥ずかしくなってきた、僕はかたことと足を鳴らす。

「おじいさんは言っんです。こんな忠実な召使いは雇おうたつて見つからない。時間を無駄遣いしないこの召使いがひとつだけ望むことといえば、週の終わりにねじを巻くことだけ……」

尻すぼみになった。

頭があつたらうなだれたい。僕は彼女のものさしでの時間経過を忘れ、無駄遣いさせてしまったばかりなのだ。

「ごめんなさい。湯上りに引き止めたりして。それにこれから、お客さんがいらっしやるんでしたね」

「いいの。わたしが知りたかつたんだから気にしないで、忠実なせっけん受けくん」

彼女の何気ない一言は、聖書の一節よりも僕には福音となる。

僕が時計なら。

お客さんがあの男性だと分かつた瞬間から、十分は針を止めていただろう。

「ケーキ買ってきてくれたの？ わあ、ありがとう」

また贈り物をしているようだ。僕には決して出来ないことで彼女をやすやすと喜ばせている男性が心底うらやましい。

彼女の時間を無駄遣いさせて、何も持たないことをひがんだりし

て、僕は分不相応な罪深いソープ・ディッシュだ。そのうえ神さまに許しを請うためにひざまずく膝も、祈り合わせる掌もない。

「紅茶いれとくから、手を洗ってきて」

「はいはい。せっけんって、コレ？」

思考の沼から引き戻されると、男性に見下ろされていた。彼女と同じ黒い瞳なのに、木炭か墨のようだ。ビスクドールの方がはるかに澄んだ目をしている。

それがなぜかと考えて、男性の瞳にあるのが侮蔑だと分かった瞬間、それを裏付けるような言葉が襲いかかってきた。

「この古くさい入れもんは何だよ？」

アンティークです！ と叫びそうになるのを何とか我慢した。世の中にはアンティークを、しょせん中古品と断じる人もいて、それは間違っではないのだ。

僕の価値は彼女が決めるもの。この男性に、ふ、古くさいとききおろされようと、き、気にしてはならないのだ。

「ひどい。アンティークって言うてよ」

彼女の慚然とした答えに、僕は大いに溜飲を下げる。対する男性はふうんと気のない返事をする、わしつとせっけんをつかんだ。

ああ、香りをかくこともしないで、それは南フランスのラヴェンダーなんですよ？ ああ、そんなびっしょびしょのまま戻さないでください、ふやけてしまったらどうするんです？ そんな、切れが悪いつて、それが肌に優しい証拠なのにお分かりにならないのですか？

Grandfather's Clockがすばらしいのは、モノが人に忠実なだけでなくて、その忠義を人が理解し感謝してくれているところだ。日本語訳では省かれてしまっている三番がまさに、おじいさんから時計への賞賛なのだ。

僕は男性が豪快に跳ね飛ばした水滴にまみれながら、濡れそばれたせっけんを抱えた。

僕の忠義はしゃべることでも歌うことでもなくてまず、彼女のた

めにせっけんをさらりと、清潔に保つことだから。そうせずして賞賛など、欲する資格もない。

決して針を遅らせず、たとえ二十四回も鐘を鳴らしちゃうとしても、彼女の喜びを喜ぶことなのだ。

ふんふんふん、と半透明のドアの向こうから、シャワーの水音と一緒に彼女の歌が聴こえてくる。

いつものように集中を傾けていた僕はふと、それが聞き覚えのある曲の、聞き覚えがある歌詞であることに気づいた。

Grandfather's Clock。日本語の大きな古時計でなく、英語の、四番までである歌詞。

あれきり教えていないのに、彼女はいつのまに覚えたのだろう。

ふと歌声が途切れた。そして直前のメロディが繰り返される。また同じところで詰まった。

歌詞が思い出せないのだろうか。僕の好きな三番の、召使いのくだり。

かたこと足を鳴らして応援してみたけど、水音にかき消されて、彼女には届かないみたいだ。調子の悪いレコードみたいに、彼女はくるくるとループしてしまっている。

がちやりとドアが半分だけ開いて、たっぶりの湯気と一緒に彼女の顔が覗いた。

「この続き、何だったっけ？ 歌って」

僕はせっけんの影から、そっと彼女を窺う。

「歌ってもいいんですか？」

「だって、歌ってしゃべれるせっけん受けくんでしょ。そこで歌ってね、こっちにも聴こえるから」

ぱたん、と半透明のドアが閉じて、戻り損ねた湯気がゆらゆら困りながら溶けていく。それをぼんやり眺めているあいだに、彼女の

レコードが回り始めた。

僕は歌う。

彼女にとって僕が歌ってしゃべれる、アンティークのソープ・デ
イッシュであるなら。僕は彼女の聖歌隊になろう。聖書を語り聞か
せる神父さまのように、与えることのできる言葉を惜しむまい。

せっけんの水切りをしながらだって、それはできるのだから。

おじいさんと時計の絆にあずかれるよう祈りを込めて、僕は歌い
続けるのだ。

4 . あやふやな存在

ブルーになる、とはこんなふう気だるく重たくなることの比喩な
んだろうか。

もちろん僕はぴかりと光る真鍮色だし、金属ゆえに最初から重い。
ブルーになるという表現は青色を授かったモノに対して失礼にあた
ってしまうから、使わずにいたい。

しかしブルーなのだ。

今日はニューイヤーズ。彼女は朝からご機嫌で、僕もそれを喜
んでいた。なににご機嫌の理由が彼の来訪と聞くと、急に世界がく
すんでしまったような気がして。

しかもニューイヤーズ。その習わしをどこかで教わったことが
ある。人は真夜中にカウントダウンというものをして、夫婦同士恋
人同士友人同士、口づけを交わすものなのだ。

自分がドールや彫刻だったらなんて思ってみたこともなかったが、
今宵だけは姿を借りたかった。彼らは唇を持っているから、その祝
福を受けられる。

彼女は午後じゅうキッチンで、ごめんなさい、失礼ながらあま
り慣れているようには見受けられない要領で料理というのをしてい
た。がっしゃーんと陶器の割れる音がしたときは一瞬、僕が丈夫な
真鍮でよかったと思ひ直したっけ。アーメン。

もちろん僕は食べるといことがないから、彼女は彼のために格
闘を重ねているに違いないのだ。

彼女の今日という日は、彼のためにあるのだ。彼女の祝福を受け
るのは彼女なのだ。

これをブルーと言わずしてなんと言おう。

彼が来る前に彼女に頼んで、バスルームに戻してもらおう。この
ままりビングテーブルにいたら、もしかして彼女と彼が祝福を交わ
すのを覗き見る形になってしまふのではないか。

あの羽のように柔らかかそうなまつげが伏せられ、淡い珊瑚色の唇が彼を迎え入れるなど……考えただけでねじれるはずのない真鍮の受け皿がねじれてしまいそうだ。

すでにねじれていないか、ついしげしげと確認した。

「うん、分かった。仕事がんばってね」

せっけんのラッピングを解いたときに一斉に放たれる、濃縮されたフレグランス。彼女の声は、彼女の身体で温まった感情がそうやって弾けるみたいに、周りを花の野に変えてしまっただが。

「はー……」

泣き出しそうなため息の主に合わせて、花々はとたんに頭を垂れてしおれていく。

僕は静かになった携帯電話なるものを名残惜しそうに見つめている彼女を見つめていた。

「彼、今日も忙しくなっちゃったんだって」

困ったように笑う口元が明らかに無理している。クリスマスはほんのわずかな再会だったから今回こそはって期待してたのを、僕は知っている。

彼が来ないのは僕にとってブルーを吹き飛ばす事柄であるはずなのに、彼女のそんな顔を見てしまったら、もっともっとねじれてしまいそうになった。悲しみは精神を雑巾にしてしまう。

僕でよければ彼とせっけんの代わりに料理を水切りします、そう提案したら彼女は元気を取り戻してくれるのか。判断できない。

「ううん、無理言っちゃだめ。彼だってこんな残業ばかりじゃ、何のために働いてるか分からないなんてこぼしてたし」

みずからに言い含めているらしい彼女の言葉を、僕は理解できなかった。

「彼は、何の目的で存在しているのか、ご自分でご存知ないのです

か？」

繰り返される早い瞬きを数えていて、二桁に達したころ、ようやく彼女の唇が動いた。

「人間って、みんなそれを探して迷ってるの」

「あなたもですか？」

「そ……そうかな」

何かの目的のために造られるモノと違って、人間は自分で自分を定義しなければいけないらしい。どんな心持ちなんだろうと想像してみる。彼女もそうだと言うのなら、きちんと知りたいから。

「僕もシヨップにいるあいだは誰のものでもなくて、落ち着かない気持ちでした。そういう心もとなさでしょうか」

「所有されたいってわけじゃないの。あ、でもマスローの欲求階層における社会的欲求って、何かに属していたってことよね。恋人にいて欲しいってというのは所有されたい欲求の一形態なのかな。うーん」

彼女は肘をついた両手で頬杖して、料理のときよりよっぽど真剣そうな顔つきになる。

「でもそうだとしたらわたしは今、彼にすっぱかされてさびしく新年を迎えるアスリってことになっちゃうのね。そんなの、マリーと付き合ってたピエールみたいじゃないの」

早口すぎてついていけない。待ってくださいとお願いする間もななく続けられてしまう。

「そうよね。彼がないからって新年が来ないわけじゃないもの。わたしはわたしのために新年を迎えるの。あ、でもわたしはわたしのためって言ってもそれは、存在の目的とはまた違う話だし」

うー、もう！ と彼女が髪をくしゃくしゃとかきまわす。ああ、レディをこんな乱れた姿にさせるとは、大変なことをしてしまった。

「おっ落ち着いてください、失礼しました、僕は失言をしたようです」

「違うの、キミの言うことは哲学的だったの。さすがフランス製よね」

フランス製であることとの関連性は見出せないのだが、これ以上の失言をしてはたまらない。遠慮がちにはいと答えた。

「パーティーメニユーって、そういえばお酒にも合うんだっ！ 二人分あるから、二人分飲みちゃう！ あはははっ」

彼女の頬に乗る朱はずいぶんと鮮やかになって、反比例するように黒真珠の瞳の輝きはどんどん失われていつているようだ。

何がそれほど可笑しいのか理解に苦しむようなことでずつと笑っていたり、話し方は妙に語尾が引つ張られているようだったり。

そういえばテイソの懐中時計さんに、酔った人間というものについて延々と嘆かれたことがあったっけ。もしかしてこれは、その嘆かわしい状態なのではないだろうか。

僕は青くなった。

ブルーになるのと青くなるのと、色の変化は一緒なのに意味が違うらしい。心の底がいきなりスカートと抜け落ちてしまうような感覚を、青くなるとたとえるのだそうだ。

人間は青くなったり赤くなったり、色彩の変化に富んでいる。せいぜい黒ずむくらいしかない真鍮の僕には新鮮だったりするのだが、今は感心している場合ではない。

彼女は酔っている。

どうすれば直るのだろうか。手入れが必要なんだろうか。オーバーホールだったらどうしよう。

「アスリさん、お気を確かに。僕は工場でもお供しますから、今すぐ修理を」

「あつ、カウントダウンが始まった！　じゅーっ、きゅーっ、はーち、なーな」

ああ、彼女は狂って過去にさかのぼる時計になってしまった。どうしよう。

「ろーく、ごー、よん、さん」

神さま、神さま、助けてください。彼女の修理に煮融かした真鍮が必要なら、僕がそれになります。だから、どうか。

「にー、いーち……ハッピーニューイヤー！」

淡い珊瑚色の唇が近づいた。僕のはしっこに、僕の固く冷たい真鍮の身体とはあまりにかけ離れた柔らかさと温もりが触れてきた。

「今年もよろしくね、ソープ・ディッシュくん」

とんでもなく近くで楽しそうに告げる彼女の声の本物だったのかどうか、そのあとの記憶がすっかり曖昧だ。きっと僕は彼女の声でできた花園を、一日中さまよっていたんだと思う。

あれが天国というものに違いない。

僕が頼りなくそこをさまよっているあいだに、彼女は酔いを自己修理してしまつたらしい。いつの間にか地上に降りていることに気づいたら、いつもの彼女がいた。時折こめかみに指を当てて痛そうにしていたから、傷が残ってしまったのかもしれないが、それも一日で修復できたらしい。

僕は安堵のあまりに、真鍮が胴と亜鉛に分解していつてしまいそうな気がした。

それにしても、あれほど劇的に自己修繕できるとは、人間ってすごい。

だが芸術の創造、精緻な細工、複雑な機構、さまざまなモノを造りだせるのに、どうして人間は自分で自分の目的が定義できずにいるのか。理解しがたい謎だ。

「えっ、やっとお休みもらえたの？ うん、今から行く！」

携帯電話を置くと、彼女はいそいそと洋服を選び始めた。もしかしてあれはデートのお誘いという嘆かわしい……いや、いやいや、喜ばしき……うーん。

彼女にとって僕が歌ってしゃべれてアンティークなソープ・ディッシュなら、ついていきたいなんて考えてはいけないだろう。僕の居場所はバスルームのはず、そうだったはず。

僕はこうして彼女に価値も目的も決めてもらえて、迷わずに済む。彼女や人間たちが迷うのは、自分たちで決めようとするからかもしれない。

僕に対して彼女がそうであるように、人間に対してその権利を持っているのはきつと、神さまだけなのだから。

5・太陽に近づいて

闇というのは、陽が名残を惜しむのと同じ速さで、ゆるゆると沈殿するからこそ歓迎される。

だから突然の停電はとても乱暴者のように思えるのだ。

「やー、真っ暗。あっそうそう、どこかにキャンドルあったはず」
すとんと闇に落ちた部屋のほうから、恐る恐るな足音が近づいてくる。ゴン、あいたつ、と悲痛な声もする。

キャンドルといえば、僕がいるシンクの下の棚にしまわれていくのを見たことがある。ここを指しているならと、僕は足をかたこと鳴らして場所を知らせた。

「きゃーっ！ あ……せっけん置きくん？ び、びっくりしたっ」
ところが怖がらせてしまったようだ。

「ごめんなさい、失礼しました」
闇で無闇に音を立ててはならない、と僕のアスリさん不文憲法に追加する。

「えーつと、これ何だろ」

モノの位置関係を把握しようとしているらしく、彼女の手がぺたぺたとシンクの周辺を探っている。そのひと触れにあずかるために、暗闇のどさくさにまぎれて移動してしまいたい。

「ただど哀しいかな、僕は真鍮だからかたこと音を立てて、また彼女を怖がらせてしまうに違いないのだ。」

僕は不埒な願望を、最新の不文憲法でよいしょと押しやった。
がしゃっ。

まるでそのタイミングに合わせたみたいだった。硬くて鋭くて、聞いたこちらの細い部分まで壊れてしまうような、陶磁器の割れる音がしたのは。

キャンドルがともされた瞬間、炎の反射によるものではない揺れが彼女の瞳を支配した。

「やだ、どうしよう」

僕はいつも不思議に思う。人間は壊してしまったモノを、とにかく急いで合わせてみたり、はめなおしてみたりするのだ。急いだつて、壊れたモノは絶対元には戻らない。

彼女も慌てて陶片をつないでみているが、もちろんそれらは一つになつたりしない。

寸断されてしまった陶片のデザインには見覚えがあつた。クリスマスにプレゼントされた、イタリア製の陶器だ。僕と同じ洗面台に置かれているけれど、見るとなぜか、どこかがざわついて仕方ないから、なるべく見ないようにしていた小物入れ。

「どうしよう……」

また別の揺れが彼女の瞳を満たした。それは下まつげでは支えきれず、たっぷりと溢れて頬の上を伝い落ちた。

涙だと気づいて、僕はすっかり動転した。がたがたと騒がしい音を立てて、僕はシンクに転がり落ちる。小さな小さな傷がついてしまった。だが、それどころではない。

彼女を、水切りしなきゃ！

歡喜、悲嘆、悔恨、苦痛、感動、哀愁、惜別、人間の涙には原因がたくさんあつて、人間同士でも正しく判別できないこともあるという。流したほうがよい涙もあるのだそうだ。

けれど彼女の黒真珠はすっかり曇ってしまったていて、その涙は窓ガラスを叩く強い雨みたいに僕を打ちつける。停電というものは嵐のあとに来るものなのに、この嵐は停電が呼んだ。その冷たさは凍える冬の寒さより身にしみるよう。

これが流していい涙のはずがない。

彼女のせつけんがびしょびしょだと心配になる。だが彼女が涙に濡れているのは、比較する気にもならないくらい、僕にとって耐え

がたい恐慌だった。

「どうしよう、割っちゃった。彼がくれたものなのに割っちゃった」
彼女のふるふるとした声は、ハンマーのように僕をがつつんがつつん殴る。

「怒られちゃう。忙しいとこ、わざわざ届けてくれたのに」

「大丈夫です、アスリさんっ。モノが壊れるのは残念なことです。
けれど人は、みずからを修理できるというすばらしい技術を与えられているではありませんか」

シンクに落ちたのは過ちだった。洗面ボウルの曲面が壁のようにそそり立ち、バスルームの床に膝をつく彼女が見えなくなってしまうっていたのだ。

「彼も残念がつて、もしあなたを咎め、傷つけてしまったとしても……それはモノと違って、きっとあなたと彼できれいに修復できるものですよね？」

かたかた暴れてみても、ハウロウに真鍮の足は滑るばかり。僕の言葉まで、こんな風に空回りしていませんように。

「僕は……僕は何のお役にも立てないけれど、彼となら、人間同士なのでから」

金たわしでこすられたなら、こんな風にギシヤギシヤと心地悪く痛むのだろう。

毎朝おはようございますと行ってらっしゃいを言っつて、毎晩おかえりなさいとおやすみなさいを言っつて、僕はあなたのためにせつけんを最高の状態で保ちます。いつもあなたが気分よく、せつけんを使えるように。

そうするのが僕の最大限で、それ以外ではお役に立てないと思っつていた。だけど彼女はおしゃべりや、歌うという役目も与えてくれた。

それはこなしている、一生懸命やっているはずだ。なのに今、自分は役立たずだという気持ちばかりが暴風のように押し寄せる。

僕は何の役に立ちたいんだらう。僕は彼女の何になりたいんだらう。

せっけんの水切りより、おしゃべりより、歌より彼女を喜ばせてあげられる何かを、僕は切望しているらしいのだ。

これが、くやしいという感情なのだらうか。

「小物入れの修繕は、マダムに相談してみたらいかがでしょう？」

「……マダムって？」

洗面ボウルのふちから、ひよこつと彼女の顔が覗いた。灯りといえばキャンドル一本だけの暗さだったけれど、まるで待ち焦がれた朝陽が昇ったみたいだった。

「僕をお買い上げくださったアンティーク・ショップ、オロール・エ・クレピュスキュールの店主です。ショップに修繕をほどこした陶磁器があつたのを覚えてます。良い修理法をご存知かもしれません」

「……そうね。わたし、瞬間接着剤使おうとすると、修理したいものより先に自分の指先がくっついちゃうの」

つまり、ぶきよ……こほん、指先が大らかでいらっしやる、と。

「うん、お店に行ってみる。ありがとう、せっけん置きくん」

初めて天気雨というものを窓越しに見たとき、とてもきれいだと思つたのを覚えている。陽光を含んだ雨粒は豪華なシャンデリアを空にかけたみたいにまぶしかった。

彼女がほたつと微笑むさまは、僕にその天気雨を連想させた。

ひよつとして僕は、水切りすることができたんだらうか？ せっけんだけじゃなくて、彼女の瞳にかかる雨雲を流してしまえたんだらうか？

僕は彼女にとって、ソーブ・ディッシュ以上の何かになれたんだ
ろうか？

急にそわそわと、わくわくと、今せつけんの泡につかまったら空
まで飛んで行けるんじゃないかって気がしはじめ。雨粒にも邪魔
されることなく、輝く太陽のその膝元へ。

「よしっ、そうとなったら今から行ってきます！」
びしっ。

「きゃーっ、破片踏んじやった！」

僕の太陽はとてそそっかし……こほん、小鳥のように気ぜわし
い。

どこが欠けると、そのぶん別のどこが育つ。それは生物だけの機
能だと思っていた。モノはどんなに修繕を重ねても、結局は段階的
に壊れていくだけだ。

でも僕は今日、小さな傷をこさえてしまったけれど、補って余り
あるくらい進化した気がするのだ。

そんな風に思うのは、モノである僕にとってバベルの塔だろうか。
旧約聖書の創世記。人々は天に達する塔を建設しようとした。神
さまは人々の言語をばらばらにし、彼らの意思疎通を断ち、目的を
果たさせなかったという。

人に近づいたなんて思うのは、不遜な慢心でしょうか。

太陽に近づいたら、イカロスのように海へ落とされてしまうでし
ょうか。

それでも彼女が望むなら、きっと僕は塔を建て、空を飛んでしま
います。

6 ・ どれほど恋の炎を燃やしても

またお役目を授かった。お留守番、なるものだ。

「それは何をすればよいものなのでしょう？」

行つてきまゝ、お留守番しててねと明るく告げた彼女は、背中をぴたりと止めて、きゅーっとぎこちなく振り返った。

「えーと、普通はわたしの代わりに電話に出るとか来客の応対をするとか、そういうことなんだけど」

僕は恐縮で小さくなつてしまいたくなつた。彼女の言い遣わしたお役目を果たせない僕の無力さに等しいと思えるだけ、小さく小さく。

「ご期待に添えず申し訳ありません。僕には、できそうも……」

「ううん、キミがそれやつてくれちゃったら、びっくりさせちゃうし」

アンティークの精霊は、話しかける相手を慎重に選ぶこととされている。僕は慎重さが足りなくて、最初に彼女へ挨拶した時はへたり込まれてしまったのだつた。

「お留守番しててねっていうのは、うん、そうそう、待つててねつてことかな。しばらく一人にさせちゃうけど、ちゃんと帰ってくるからね」

何という思いやり。モノというのは待つているのが当たり前で、声などかけてもらわず、気遣いもないのが普通なのに。

僕は間違いなく、世界で一番幸せなソープ・ディッシュだ。

ほかほかとしてきて、受け皿の水滴が瞬時に蒸発しそうに思えた。踊りだしたいけれどそこまで動くことはできないし、第一、彼女の大切なせっけんを落としてしまう。

「はい。行つてらっしゃい、お気をつけて。お帰りをお待ちしてま
す」

やけに意気込んだ挨拶になつたが、彼女がご機嫌なら万事良いの

だ。

「うん。デートの後、ルイくんに会うの。せっけん受けくんの話、しておくね」

「……え？」

彼女は僕の困惑に気づかず、軽やかな足取りで行ってしまった。

ルイさんというのは、彼女が僕をお買い上げになったアンティーク・ショップ、オロール・エ・クレピュスキュールのマダムのお孫さんだ。午後になるとよくマダムに代わって店番をなさってた。

話しかけてもらったことはない。ルイさんが話しかけるのは、連れ歩いてたテイソの懐中時計さんだけだった。

ルイさんはいつもひどくつまらなそうにしている、懐中時計さんを除く店中の精霊たちは、ルイさんと進んで関わりうとしなかった。僕は毎日挨拶はしたけれど、あーとかうっすとか、少しばかりぞんざいな返事を頂いただけで終わってしまった。

彼の悪癖は、誤解されるように自分から故意に仕向けることだ。ご両親の死に納得できずにいるのを、悟られたくないのだ。

テイソの懐中時計さんがマダムにそうこぼすのを、聞くでもなく聞いてしまった覚えがある。ルイさんは配達があるとかで、懐中時計さんに『売約済』の札を挟んで時計展示棚へ押し込んでいった時のことだ。

せめて『非売品』とすればいいものを、わざわざこうして無神経なふりを装うのだからな。マダム、ルイには同じ年頃の心優しい友人が必要だよ。

アスリさんならきつと、その心優しい友人になってくださるに違いない。

がちやり、と待ちかねた鍵の開く音がした。

彼女は帰ったらすぐに手を洗って、メイクを落として、お風呂に

入って、僕は忙しくなる。せっけんの乾きは完璧、ちょっと身動きして位置を中央に整え直す。気を引き締めつつ、おかえりなさいを言おうと待ち構えていた。

ところが聞こえてきたのはいつもの軽やかなステップではなく、乱雑な足音と男性の声。

「一瞬我慢して立っててくださいよ。靴のストラップ外せないですよ」

「うー、まっすぐ立てないー」
ルイさんだ。ルイさんにしてはやけに猫なで声だが、あれは確かに。

「ごめんねー、こんなとこまで送ってもらったりして」

「いいっすよ。俺が飲ませちゃったんだし」

「ううん、聞いてくれてありがとう。彼にあんな、あんなこと言われるなんて、お、思ってたなかつ」

涙声だ！

僕は慌てた。彼女に何かあったのだ。

駆けつきたいけどそこまで機動性のある足じゃないから、せめてにじにじと洗面台の上を移動する。

「どんだけ泣いてもいいっすよ、ここなら俺しかいないんだし」
僕がいます！

と叫ぼうとした瞬間、ふえーんと派手な泣き声が響いてきた。

「せっけん皿くんがしゃべるの、って教えてあげたのに！ 精神科で診てもらえだなんて、ひどいっ」

一番寒かった冬の日より、もっと芯から凍るような寒さが足元からぞわりと駆け上がる。

彼と喧嘩したんだ。僕のせいで。彼は精霊の存在を信じてくれなくて、彼女を壊れてると誤解してしまっただ。

とんでもない、彼女は完璧だ。僕から彼に保証したい。

「それはね、彼の優しさかもしれない。だけどわたしは、信じてもらえなかったのが悲しいの。せっけん皿くんが本当にしゃべるかど

うか、が問題なんじゃなくて」

うんうん、そうっすねとルイさんはらしからぬ熱心さで慰めていて 意外だ。ルイさんって、人間の女性には優しいのだからうか。シヨップのアンティークたちへの態度とは、ずいぶん違うようだ。

「男の人って通販のお洋服みたい。気に入って取り寄せたのに、手にしてみると思い通りの色じゃない。だからって返品しても、気まずさばかりが残るの」

もどかしい間があった。三秒。五秒。わーっと叫びだしたくなるような沈黙が続いて。

「……なら、俺を試着してみる？ アスリさん」

僕はシンクに落下した。

その直後は音の洪水だった。

まずは僕自身がシンクに跳ねる、がらんからん、と硬い音。そして遠くから、チン！ チン！ と小さなベルの音、聞き覚えのあるあれは、テイソの懐中時計さんのミニッツリピーター？

「やだあ、ルイくんたら、あはは」

彼女の明るい笑い声、それからべしつと何かが叩かれる音。いてっ、とルイさんの苦笑まじりな応答。ぴきぴきと触れたら発火しそうに張り詰めていた場が、それで和らいだ。

アスリさんがルイさんの心優しい友人になるのは、歓迎すべきことだ。理解しているのに、とっさにダイブしてしまった。僕は一体何をやっているのだろう。

「トイレ借りていいっすか？」

「うん、あっち。コーヒー淹れとくね」

そして僕は、せっけんを放り出しひっくり返った無様な姿をルイさんにさらすことと相成った。

「おまえら、そろって邪魔しやがって」

乱暴な口調とは正反対な慎重さで、ルイさんの手が僕を洗面台に連れ戻す。口元にはおかしそうな笑みを乗せている。

ふと気付いた。そういえばルイさんはアンティークたちにぞんざいな態度をとりはしても、決してぞんざいに扱ったりはしなかった。面倒そうにしつつ、きちんと正しい手入れを施していた。

何を考えてるのか、良く分からない人だ。

「ほら、アンティーク同士、昔語りでもしてたらいいですよ」

洗面台にティッシュを何枚も重ねた上へ、テイソの懐中時計さんが置かれた。オロール・エ・クレピュスキュールの王に等しい双壁に、僕は緊張してすぐに挨拶もできない。

美麗にして精緻な模様が彫られた金蓋の下から、深々としたため息が漏れた。

「体のいい厄介払いというわけかね、ルイ。不自由な身が嘆かわしい。私は君の父上に、ルイの事は引き受けると誓ったのだ。この有様では親友に顔向けできない」

「ふん……」

バスルームを出て行くこうとしていたルイさんは、顔だけ振り返って、低く笑った。

「勘違いしないでくださいよ。俺があんたを、親父から引き受けたんすよ」

ドアは迷いなく閉められてしまい、僕らは暗闇に取り残された。

足音が遠ざかり、遠くで陶器の触れ合う音がし始めた。

重く寒々しい沈黙が降りる。

僕はルイさんと、ルイさんのお父上と、テイソの懐中時計さんの間で何があったのかわらない。

だが、彼らもがいている苦しみだけは感じ取ることができた。

運命のリボンが絡まって、身動き取れなくなることもあるのだろうか。

「あの……お久しぶりです、テイソの懐中時計さん」

「うむ」

気を取り直したような、すっかりした返事にほつとする。

「聞いた限りでは、アスリ嬢と好ましい関係を築いているようだな。どうだね」

「はい、それはもう」

「つつい僕は、彼女と出会ってからの日々を熱心に語ってしまった。」

それでも彼女が望むなら、きっと僕は塔を建て、空を飛んでしまえます。そう言ったあと、ティソの懐中時計さんは長いこと黙っていた。

僕はただならぬ雰囲気を感じて、それ以上話すのをやめた。

「……ソープ・ディッシュ。君が忠僕であることは疑いの余地がない。だが」

やがて穏やかながらしっかりした口調で切り出された。

僕が彼女のもとを去り、アンティーク・ショップ、オロール・エ・クレピュスキュールに売ってくださいと願い出ることを決めた、あの台詞を。

「アスリ嬢と恋人の争いの原因は聞こえていたな？」

「はい」

何か恐ろしいことを言われようとしているのだ、と分かった。しんしんと冷えだした空気が、僕を丸ごと動けなくさせる。

「真鍮は亜鉛と銅の合金だ」

「はい」

「煮融かして、また生まれ変わることもできよう」

はいと答える僕の返事は、猟師に撃たれる鴨のように、飛び立つ前に足元へ落ちていくような気がした。

「だが人とモノとは異なる。人間であるアスリ嬢とは、どれほど恋の炎を燃やしても溶け合うことは叶わぬ。ただ相手を灰にするのみ

だ
」

オロール・エ・クレピュスキュールの店先で。

窓の外の彼女がいない冬景色を眺めながら、僕はぼんやりとその
台詞を反芻している。

7・神のみわざであると、願わくは

僕の時間は止まったきりだ。

白い朝陽が射す。影が木立の足元でぐるりと回る。黄昏色の夕陽がふつりと窓から逃げ出し、やがて重い闇が落ちてくる。

日が長くなり、お客さんの服装は軽くなって色彩が増える。窓の向こうに見える桜のつぼみはふくふくとしはじめる。

だけど僕の時間は止まったきりなのだ。その理由を僕は知っている。

時が経つという現象は、陽の周回や針の進行が決めるのではない。僕にとってそれは、彼女のせっけんが小さくなっていくということだった。空虚な、一滴の水分もなく乾いた受け皿は時を数えない。

プロヴァンス産のラヴェンダーのせっけん、あれは今どうなっているだろう。どのくらい軽くなっただろう。もしかして代替わりして、僕の知らない香りのせっけんが据えられているかもしれない。

どんなソーブ・ディッシュが水切りしているのだろう。精霊つきだろうか。

僕はどうしてそれを知ることができない身に堕ちたのか。

あれからルイさんとアスリさんがたまに会っているようなのは、ルイさんと懐中時計さんの会話から推測できる。だが彼女は僕を手放して以来、一度もこの店にはやって来ない。

モノは人の手から人の手へ流れていくのが当然だと思っていた。ソーブ・ディッシュとしてせっけんを美しく保てれば、それでいいはずだった。

なのに僕は彼女以外の人間のためにそれをすることを嫌がり、僕以外のソーブ・ディッシュが彼女のために働くのを嫌がり、彼女の運命のリボンが僕以外とも結ばれるのを嫌がった。

人間であるアスリ嬢とは、どれほど恋の炎を燃やしても溶け合うことは叶わぬ。ただ相手を灰にするのみだ。

恋だという自覚はなかった。

けれども僕が一緒にいる限り彼女を灰にしてしまうなら、僕はひとりで炉に入る。

そうすればアスリさんが壊れてしまったなんて、もう誰も誤解しない。そしてもう傷つくこともない。

これはあらぬ翼で空を目指した僕への罰。できるのは、ほどけた運命のリボンがほりりをかぶらぬよう、そっとしまい込むだけ。

だから神さま、彼女に安息を与えたまえ。

あれ以来、僕は誰とも話をしなくなった。言葉はバベルの塔、イカロスの翼。僕はしゃべってはいけない存在だった。モノはモノとして、ただ与えられた役目を果たしていればいいのだ。

コロロンとベルが鳴ったらドアを眺める動作は、すっかり習慣になってしまっている。彼女ではないのだと思い知らされる鈍色の重さにも慣れた。

慣れていたからこそ、それが彼女だという驚愕は強すぎて、太陽が千倍の明るさになったかと思うほどに世界は白くなった。

「……いらっしやませー、うちで不良資産を委託販売してるアスリさん」

シヨップにはルイさんとアスリさんだけ。気心知れた様子のルイさんの挨拶には、少し意地悪な笑いが含まれていた。

「デイツシユくんをそんな風に言わないで。……まだ、ここにいるのね」

世界が真っ白から爛漫の春色に染まりだす。周りを花の野に変える、彼女の魔法の声は健在だ。その魔法の中に安堵の響きを感じたのは、僕の錯覚だろうか。

彼女がことん、ことんとヒールを鳴らしてゆっくり近づいてくるにつれ、封印したはずの炉がぐらぐらと煮えはじめ。言葉と一緒に

に熱も、運命のリボンも全部閉じ込めた炉だ。

髪型が変わっている。見たことのない服。少し痩せたのではないだろうか。記憶の中にいた彼女との相違点、それらの一つ一つが不在の長さをいちいち突きつけてくる。

ああでも、黒真珠の艶は見えないあいだに深みを増した。僕に「目が合う」ことを、身をもつて教えてくれた瞳だ。しまい込んだはずのリボンがうずきだす。出会った片端を求めてひらひらと舞い上がるリボンを、僕はたぐりよせて引き戻そうと躍起になる。

そんな僕を見下ろす彼女の頬には、ぎこちない硬さが漂っていた。

「……ルイくんには、しゃべった？」

「ゼーンぜん」

レジの置かれたテーブルで、ルイさんはだらしなく頬杖をついている。僕とアスリさんの再会を面白がって、遠巻きに見物しているようだ。

「アスリさんが壊しちゃったんじゃないっすかー？」

「そんな……」

ルイさん、アスリさんをいじめないでください。そう嘆願したくとも、目を決め込んだ以上はできない。もどかしくとも、足を踏み鳴らすことも許されぬ。僕はただのソープ・ディッシュに戻ったのだから。

「あのね、ルイくん……今頃分かって、遅いのかもしいないんだけど」

珊瑚色の唇が震えている。黒真珠から海があふれだす。彼女の指先は見えない壁に阻まれているかのように、ある一点から動けずにいる。そのひとふれにあずかった日々の、なんと幸せだったことか。「ディッシュくんはね、初めてしゃべってくれたとき、こう言ったの。年月を重ねて話せるようになったソープ・ディッシュと違って、年月を重ねて話せるようになったソープ・ディッシュと違って、心を持ったソープ・ディッシュくんだったの」

「ふーん。だから？」

「だから」

ルイさんに突き放すように扱われて、彼女の海は勢いを増した。

「ドイツシユくんが……身を引いちゃったんだ、って可能性を考えたもみなかったの。だけど分かったら、ここに来ちゃって……」

「あっそーっすか。それで？」

アスリさんをいじめないでくださいってば！ ルイさんは僕がそう叫びたがっているのを百も承知なのだろう。挑発するように薄く笑いながら、僕の出方を窺っている。

ルイさんはアスリさんに対し、僕という精霊を知らず、僕と話をしたことがないかのように振舞う。その意図を、僕は白い思考で飲み下そうと試みる。

「それで、ドイツシユくんを連れ帰りに来たの！」

「アハハツ。アスリさん、アンティークに精霊がいるなんて本気で思ってたんすか？」

「いるの！」

アンティークに精霊がいることを誰より知っているはずのルイさんの、侮蔑に満ちた嘲笑の意味も。

「あーはいはい。いるとして、そいつと恋愛なんてできると思ってるんすか？ 相手はモノっすよ？ 目に見えない精霊っすよ？」

「でも心を持つてるの！」

涙に濡れながら必死に言い返すアスリさんの悲愴の理由も。

「ヒトの形でもモノの形でも、中にあるものは一緒だった。わたしはそれに気づいてなかったの。ルイくんもわたしの頭がおかしいって思うのかもしれないけど、それでもいい。みんながありえない恋愛だっと思うのかもしれないけど！」

「思わないっすよ？」

一転して静かに笑うルイさんの突然の変貌ぶり、その瞳の奥の暗

い影も。

「でもさあ、アスリさん。スープ・ディッシュもそう思ってなきや、どうしようもないんじゃないの?」

「……僕は」

言葉を発したのは何日ぶりだったのか。僕の時間は止まったきりだったから不明だ。

「僕は毎朝おはようございますと行ってらっしゃいを言つて、毎晩おかえりなさいとおやすみなさいを言つて……せっけんを最高の状態で保ちます。いつもアスリさんが気分よく、せっけんを使えるように」

「それだけ?」

彼女は不安そうに、問い返してきた。

それだけ、だなんて……僕にはそれ以外できません。それ以外ではお役に立てません。これ以上僕に一体、何をお望みですか? かつて僕はそう答えた。

「あなたとおしゃべりをして、あなたのために歌を歌つて、あなたの涙を水切りして」

「それから?」

ただど今は、彼女が中にあるものは一緒だと言つてくれた今は。僕は炉を開放して精一杯、運命のリボンの端をひらひらと、その先が結ばれているはずの彼女に向かって振るのだ。

それは神さまにしか見えないけれど、感じることはできるから。

「これから……よろしくお願いします。アスリさんと、その……等しい存在として」

「ディッシュくん……こちらこそ、よろしくね」

どこかでウエディング・ベルが鳴っている。違う、あれはドイツの懐中時計さんのミニッツ・リピーター。Grandfather

's Clockの主人が花嫁を連れてきた時と同じ、二十四回の鐘。

「すまないことをした。私は親友などと口にしながら、結局は一線を引いていたのかもしれない」

「ま、気にしない。頭の固いジジイにはよくあることですよ」

「君も、わざわざ一線を引きたがる癖を直したまえ」

僕の時間が動きだす。彼女と、彼女のせっけんと共に。

それはね、わたしたちにとって、この上なく幸せなことよ。

神さまが目に見えない運命のリボンを、ひらひらと振って教えて下さる瞬間なの。

神さまは僕たちに、決してじかに話をしてはくださらない。正しい答えも、正しい道も、個々に教えてはくださらない。けれど思いもよらないわざをもって、僕たちの心を打たれるのだ。

「目が合った」のが神のみわざであると、願わくは、僕と彼女で定められますように。

The end

1・放牧

1・放牧 アンティーク・ショップでは、客を心ゆくまで牛歩させておくのがいいのだ

オロル・エ・クレピユスキール。

舌がつつて唇が凝りそうな、これがばあちゃんのアンティーク・ショップの名前。フランス語で暁と黄昏って意味らしい。由来は、そっぴや聞いてみたこともないな。

そもそも俺はアンティークになんて興味ないんだ。

ガキの頃からショップに出入りして、さんざオモチャにして遊びはした。だがゲームや漫画や女の子とのデート、世の中は娯楽に溢れてる。何も古めかしい、手入れの面倒なモノを相手にしてやる必要なんか感じない。

じゃあ、どうしてそのオロル何とかでバイトしてんのかって？

家業を手伝うのは当然だろ　なんて、そんな殊勝な理由じゃない。ばあちゃんの腰はとづくに、花瓶より重いもんには耐えられないからさ。

アンティーク・ショップの経営ってのは意外と力仕事でね。回転木馬だのライティング・ビューローだの、展示するにも梱包するにも男手はいるってわけ。

商品を売れば、その純利の半額を歩合でもらえるってのもおしいね。居酒屋なんかであくせく働くより、よっぽど稼ぎがいい。

その場合、アンティークの知識なんぞない俺は、ちよいと手助けしてもらわないと売るもんも売れなかつたりするんだけどな。

コロロンとドアベルが鳴って、入ってきたのは楚々としたおねーさん。知的だけどどつか勘のニブそうな可愛さがあって、これが店じゃなくて街中だったらナンパしちやいそう。

「いらっしやいませー」

店番してた俺は、奥から控えめに声をかけた。アンティーク・シヨップでは、客を心ゆくまで牛歩させておくのがいいのだ。俺がシヨップのドアベルを密かにカウベルと呼ぶ理由はここにある。

フィーリングで買うか投機で買うか、いずれにしるまずは放牧してやる。

「あれは買っつすね」

俺はジーンズのポケットへ、小声で話しかけた。

「何が何でも買って帰るって目をしてますよ。クリスマス・プレゼントを買いに回れる日が今日しかないか、クリスマス前だったのに男に振られて、散財するのを決めて飛び込んできたかつすね」

「……後者であれば拾い食いしてしまおう、などとよからぬ思想を抱いたりしていないだろうな？」

「抱きまくりつすよ」

「ほう。それほどの姫君とあらば、とくと拝まねばなるまい」

つまり俺に動けと言っただな。人使いの荒いやつめ、と内心だけで悪態をつきながら、俺はポケットからそいつを引っ張り出してやった。

テイソの懐中時計だ。

テイソはスイスのメーカー。今でこそ斬新で廉価な腕時計というイメージがあるが実は、懐中時計となると話は違っただな。

博覧会での数々の受賞を誇る優れた技術、加えて宝飾品のような芸術性の高いデザインってんで、ロシアじゃ皇帝が使ってたそうだな。エルミタージュ美術館にも飾られてるんだってさ。

そいつを模したモデルは皇帝ウォッチなんて呼ばれて、お値段ウン十万だ。

こんなウンチク、テストにも出ないってのに、こいつに語られて

覚えちまった。脳細胞の無駄遣いさ、まったく。

「何をしているんだね、ルイ。姫君には、ひざまずいて手の甲にキスできる距離まで近づけといつも言っているだろう」

「へいへい」

「返事は一度でよろしい。君の不敬は年々悪化するばかりだ、まことに嘆かわしい」

歴史あるメーカーの時計だからこいつの態度がこんなにデカいのかと言うと　タチの悪いことに、この懐中時計は真正正銘、ロシアの貴族に愛用されていたアンティークときた。市場に出れば言いたかないが、数百万はかたいシロモノだ。

そんなもんがどうして俺のジーンズなんかになまってるのかというと、長い話になるんで、またの機会ってことにしてくれ。

テーブルウェアやバス用品の一面に、楚々として知的だけどどどか勘のニブそうな可愛いおねーさんは突っ立っていた。

ははあ。

俺は今日の歩合制給料にありつけることを確信する。

おねーさんはまさに、蛇にいらまれた蛙。雷に打たれちまった。

一目惚れ。金縛り状態。何とでも言え、とにかくビリビリにキちゃってる。

こうなるともう客に選択肢はない、財布を出して決済する、それだけ。もし後ろ髪引かれながら帰っても、翌日には舞い戻って買っていく。賭けてもいいね。

凝視してる視線を追うと、相手はどうやら真鍮製のソープ・ディッシュのようだ。

「ふうむ。馬に蹴られて死にたくはない、ルイ、退却するぞ」

掌の中の懐中時計がひそひそと囁いてくる。

アンティークの知識がない俺が接客する時、こいつはこんな風に

ひそひそとウンチク話を流してくれる。アンティーク好きな人間は総じてウンチク好きだ。興味ある品物を前におあずけ状態の牛へウンチクという牧草を差し出せば、まず間違いなく食いつく。たやすいもんだ。

だが真鍮製のソープ・ディッシュについて語ってやれるウンチクなどそうなさそうだし、何しろ退却命令が出てる。さりげなくターンして奥へ戻ると、ばあちゃんが休憩から帰ってきてた。

「ばあちゃん。先週入れた、ソープ・ディッシュ。売れそうだけ」
「おや、まあ どれ」

シヨールをかき寄せながら、ばあちゃんは首を伸ばした。

「見覚えのあるお嬢さんだね。大事にしてくれそうだ」

「あのソープ・ディッシュにはもう少し、人間の世界を知る時間を与えるべきだよ、マダム」

「無理つすよ。買う気満々つすよ、あの人」

「そうねえ。お若い二人だから、何とかなるんじゃないかしらねえ」
二人と一個の懐中時計で噂するあいだに、おねーさんはバッグを探りだしてた。財布を出す気だな。よっしゃあ、クリスマス前だつてのに男に振られて、散財覚悟で飛び込んだパターンで決まりだ。

セールを葉書でお知らせしますから、と言うと、おねーさんはすんなり顧客名簿に個人情報を入力してくれちゃった。

アスリとは、初めて目にする名前だ。まあ、俺のルイもこの国じゃ珍しがられるってことに変わりはないけどな。

おねーさんが顧客名簿を書いているあいだ、手持ち無沙汰なんで、包みますねと言って奥に引っ込んだばあちゃんを覗いてみた。

「短い間でしたが、お世話になりました」

「あなたとはもっとお話をしていたかったけれど。これもご縁です

からね。お嬢さんに大切にしてください」

別れを惜しんでらしい。精霊つきのアンティークなんてそうそう転がってるもんじゃないからなあ。ばあちゃんの人徳で、このシヨップには幸か不幸か精霊つきがごろごろしてるが。

「取り置きにして、そのあいだに徹底教育というわけにはいかないものか。この私が見ずから教鞭をとろうではないか」

こういう口うるさいでしゃばりもいるわけだ。俺は口封じに、懐中時計をジーンズのポケットにねじ込んでやった。ミニッツリピーターを鳴らして抗議してるが無視だ、無視。

アスリちゃんは精霊つきソーブ・ディッシュの入った紙袋を、そりゃあ嬉しそうに受け取った。可愛いな、おい。クリスマスにデートの予定を入れちまったのが悔やまれる。

いいさ、名前も住所もばっちり入手済みなんだ。今は放牧していいやろう。年明けにでも俺印のカウベルをつけにいこうか。

アンティークと違って女は、古くなるほど喜ばれるってもんでもないからね。

2・青輝

2・青輝 俺は指輪じゃなくて女を鑑定してやったんだぜ、上司さんよ

ブルーダイヤをもらったの。

女にそう嬉しそうに報告されたって、別に何とも思わない。しかも堪能したあとだから、むしろほっとしてっ感じ。ふうんと答えて裸の身体を伸ばす。

「お歳暮には洗剤が定番らしいからな。ばあちゃんところにも来てたぞ」

「何のこと？」

宝石と洗剤をわざと間違えてやった俺の鋭いセンスを理解する才能が、この女にはないようだ。こいつに求めるのは脳みそでも誠意とやらでもないから構わないが。

「これよ、これ。パパに買ってもらったの」

パパと呼ばれてるのは実父 なわきゃない。どうせ不倫関係にある上司だろ。クリスマスに男は家族サービスだってんで、さもしい愛人は俺と無理矢理クリスマスの予定を埋めたってわけだな。

ぐいぐい突き出してくるから、仕方なく薬指にはめられた指輪を一瞥してやった。ホワイトゴールドにちまつとしたダイヤが三つ、中央がブルーだ。数万円ってとこか。

明日デートする子に下見と称してジュエリーショップを引きずり回されたから、にわか鑑定眼がついちまった。

女は指輪を眺めながら、にんまりとどこか下卑た笑いを浮かべた。見なきゃよかった。

愛情を天秤に載せたとき、つりあう分銅は愛情でしかないんだぞ。

オロール・エ・クレピュスキュールの店番をするときにいつもジーンズのポケットから騒ぎ立てるあいつの言葉が、ふと頭をよぎる。「とつても稀少なんですって。イヴと一緒に過ごせないお詫びだよ、って」

「へえ。……ちよつと貸してみよ」

俺は下着だけ身につけるとベッドから脱け出した。キッチンに入つて冷凍庫を開けると、借り受けた指輪をその中へ放り込む。

「やだ、何するのよ!」

慌てて駆け寄ってくる女から、腕組みをして背で冷凍庫のドアをブロックする。

「鑑定だよ、鑑定」

「いいか、カラーダイヤモンドにはナチュラルとトリートメントがある。ナチュラルはそのものズバリ天然モノ、ファンシーとも言うな。トリートメントは人工物だ。放射線を当てたり分子構造を変えたりした人造カラーダイヤモンド」

「にせものってこと?」

トリートメントと模造はまた違う。ジルコニアなんかの模造ダイヤモンドは、石そのものから人の手で作り出している。トリートメントダイヤモンドの場合、石自体は本物のダイヤモンドを使っていて、ただ着色のみが人工だというだけ。

こんなことも知らずにブルーダイヤモンドをもらったなんて喜んでる女には、たとえジルコニアでも豚に真珠ってやつだよな。

「当然、ナチュラルとトリートメントじゃ稀少性が違う。カラーダイヤモンドの中では数が多いピンクだつて、全ダイヤモンドの0.01%らしいぜ。一番高いのはブルーだ、採掘量が少ないからな。もしあれがナチュラルのブルーダイヤとしたら、値段は、そうだな」

「いくら?」

乗り出してくるな。そんなに、男の詫びの気持ちの値段を知りたいのかよ。

ベンツが新車で買える値段だ、とは黙っておくか。武士の情けだ、見ず知らずの上司さんよ。

「ま、その前に判定と参りますか」

冷凍庫からきんきんに冷えた指輪を出す。はあつと息を吹きかけると、表面が曇った。

「ダイヤは熱伝導率が高い。本物ならあつというまに曇りがとぶはずだぜ」

期待に満ちて覗きこむ女の目は数秒たち、ダイヤの曇りと一緒に晴れた。ほとばしる歓喜の声はおいおい、ベッドで騒いでた時よりでかくないか？

「ナチュラルでもないが模造でもない、ってわけさ」

「えーっ？ 天然のブルーダイヤじゃないの？」

おめでたい女だ。

「ナチュラルはそもそも市場に出回ったりしない。資産家が現物資産に買いあさってるって噂だしな。ま、トリートメントでもダイヤだし、詫びには違いないだろ」

「なによー、最初っからにせものって分かってたの？」

にせものじゃないって言ってるだろ。この調子じゃ、不倫相手の詫びの気持ちまでにせものだと疑い始めかねないな。

「結婚式のサムシング・ブルーにブルーダイヤを使うやつもいるらしいぜ？」

「彼は奥さんとは離婚しないって言ってるもん！ ばかあ！」
フォローしても無駄か。

以前、ブルーダイヤのネックレスを、サファイアだと思い込んでオロール・エ・クレピュスキュールへ売りに来た女がいたな。ばあ

ちゃんがいなかったのをいいことに、サファイアの値段で買い取ってボロ儲けさせてもらった。

その価値を知らない者に、正しい対価を受け取る権利はないんだ。ブルーダイヤのネックレスが自分たちの葬式代と墓石に化けるのを、両親は苦笑して見ていただろう。

ブルーダイヤの稀少価値だの鑑定法だのは、あの時にあいつテイソの懐中時計から教わったんだ。どうしてこう、人生に役立たない知識に限っていつまでも覚えちまってんだだろうな。海馬の浪費だ。

そういや呪いのブルーダイヤ、ホープダイヤについても一席、いや一石ぶってたな。何日か前に可愛いおねーさん　アスリちゃんだったか、に買われていったソープ・ディッシュにも、得意気に語ってやがった。

持ち主が早世する原因として、ホープダイヤが微弱な電気を発して、それが肌に触れた人間にマイナスの作用を及ぼすからだなんて言われてる。

俺はそうは思わないね。

宝石ってのは、価値があればあるほど、人はその前で本性を現さざるを得なくなるのさ。男の詫びの気持ちをはかるうとした女みたいにね。理性や便宜や駆け引きなんか頭から吹き飛んでっちまうくらい、カネのことではいっぱいになるんだ。

カネにこだわらないやつだけが、その呪いという名の欲望から無事でいられんのさ。

だから個人の思惑とは無縁のスミソニアン博物館に行き着いて、ホープダイヤは解放されたんだ。

女は電話を始めて、あのブルーダイヤはにせものだと喚きたてる。にせものじゃない、トリートメントだったのに、家族サービス

中に愛人に喧嘩を売られる男ってのは哀れな図だな。

これに懲りて、ブルーダイヤどころか真珠も似合わない豚を飼うのはやめとけ。俺は指輪じゃなくて女を鑑定してやったんだぜ、上司さんよ。

さて、俺も退散するか。こんなことならこの女とのデートはキャンセルして、アスリちゃんを追いかけてみるんだった。あのガキくさいスープ・ディッシュの精霊がどうなってるか、気にならないわけじゃないし。オロール・エ・クレピュスキュール、アフターサービスの一環だ。

だがね、ルイ。地球上の全てに等しく謁見を許されたブルーダイヤは、夜空を見上げればいつでもそこにおいでだ。這いつくばって鉱山を掘り返すなど、愚の骨頂である。

女の部屋を出る。あいつの言うブルーダイヤは、空一面にぶちまけられていた。

3・潤滑

3・潤滑 カネってのは、男と女の潤滑油か？

クリスマス前のオロール・エ・クレピュスキュールは客が増える。買いに来る客、そして売りに来る客。男が贈るプレゼントの値段に比例した角度に、女は脚を開くって寸法だ。

「ねえ、ルイくんちってお金持ちなんだね」

数時間前に買ってやったネックレスしか身につけていない女がすり寄って来る。んなわけあるか、と言いながら押し戻してやった。

「じゃあ、なんでこんな高いものプレゼントしてくれるお金があるの？」

こいつも昨日の女と同類なんだろうな。欲しがったから買ってやった、それだけの話なのに、そこへ値段を割り込ませてくるなんて興ざめもはなはだしい。

カネってのは、男と女の潤滑油か？ それがなきゃ回らないのか、世の中ってのは。

「クリスマス前に、掛け時計をショップに持ち込んできた大学生くさい男がいてさ。女に貢ぐ資金繰りに困ったのか知らねえけど、その時計はいかにも家の物置からくすねてきましたって勢いでホコリかぶってて」

俺に言わせりゃ、自分の所有物じゃない資産を切り売りしてまで女に貢ごうとする、その男の根性こそがホコリをかぶってる。くすねてきたとなりゃそれこそ、叩けばホコリが出る体の出来上がりだ。「そいつは、時計なんだから動かなきゃ買取価格が下がると思ったんだろうな。ふたを開けて油を差してみたが動かない、壊れてしまっているようですと身を縮めながら言うんだよ」

それでも買い取ってもらえるのかと上目遣いする卑屈な男をいじ

めてみたくなるのは、当然ってもんだろ。

「へえ、油ってまさかサラダオイルとかじゃないでしょうね、とか顔をしかめてみせたらさ、そいつは慌てて手を振って言うんだ。ちやんとミシン油を差しました、でも油が古かったのかもしれないねって」

余計なことを、箱に油染みでもついたらどうしてくれんだよ。内心では罵倒しながら、外面では何食わぬ顔で、鑑定のあいだ店内をごろんになっていて下さいなんてすすめて追い払った。

ポケットから引っ張り出したテイソの懐中時計に掛け時計を見せると、流暢なお答え。

透かし彫りの豪華さから推測するに初期型である、ギボシはオリジナルのようだし漆の状態も申し分ない。掛け時計の一番人気、ユンハンスのバイオリン、シヨートケース 見たまえルイ、姫君の御髪のごときこの優美な曲線を。

裏蓋を開けて、機械部分を外してみた。ざっと見ただけだが、油で目詰まりしている以外はきれいなもんだ。ミシン油の臭いが鼻につくから、さつさと元に戻して男を呼んだ。

「俺は、動かないようですね、お値段はこれくらいでいかがでしょうと紙に書いた。オーバーホールして動くようにしてから転売してやったその掛け時計の正当な値段から、一つゼロが足りないくらいの数字をね」

「えー、悪いんだ、ルイくんってば」

全然悪くなさそうに笑いながら女が言う。プレゼントの資金源が、切羽詰った男が持ち込んだ掛け時計の買取と転売の差額だと知っても無頓着でいるような女だからな。

「動かないから安い値段だなんて、俺は言っていないぜ」

どうせ俺も悪いなんて思っちゃしない、無知は損するってレッス

ン料さ。ま、そいつがレックスだったと気づかないままの可能性は高いけど。

「油が劣化して固まって、機械が動かなくなってただけの話さ。そいつの母親も昔ミシン油を差してみたんだろうな、ギトギトになってた」

ちゃんと分解修理して正しく注油すりゃ、掛け時計はあの大きな古時計さながら、九十年だって動くってのに。

こんな無知のせいで残っているはずの寿命を打ち捨てられてしまふモノが、世の中にはなんと多いことやら。アンティーク・シヨップはモノの第二、第三の人生への出発の門なのさ。

「ミシン油は時計油とは粘度が違ってね、精密機械向けじゃない。ロシアがなかなか捕鯨をやめなかったのは、時計油みたいな精密機械油を」

ふと思いついて女に体を寄せ、ネックレスのチェーンに唇を押し当てる。

「マッコウクジラは英語で Sperm Whale だったんだ。Sperm は俺が今からおまえん中に出そうとしてるもんだ、分かるな？」

「やん、もつ」

とか口では言いながら嬉しそうだな。

「マッコウクジラの頭ん中には、脳油つつう浮力調整用の油が何トンも詰まってるんだ。その脳油がソレに似てるから Sperm Whale なんだよ。時計にはソレが塗りたいくらわれてたってわけ」

「いやあ」

人の手による機械が動物の存在なくしてまともに動かないって構図は、俺にはなかなか意味深いもんに思えるけどな。

今じゃ時計油には精製鉱油と精製油脂の混ぜもんや、合成潤滑油

なんてもんが使われてるらしいが。その原料の石油だって、もともとは生物だって説もある。

「人の潤滑油は女頼みなのね」

あいつに聞かされた時計油談義が、こんなところで役に立つとはね　舌打ちしかけたところで、女がそう言った。

優越に笑う口元を見ちまったら、お仕置きしたくなってくるのも当然ってもんだろ？

「でも、出させるのは男だろ」

カネでも体でもね。その両方をこの女に教えてやるところ。

「ルイクンって、なんか危ない人」

「なんで？」

「心の油が固まって、動けなくなっちゃってる感じがする」

うるせえよ、とそれ以上まともにしゃべれない状態にしてやった。自分でも気づいてて、それでもどうしようもないことを指摘されんのは心底腹が立つ。

俺の正しい潤滑油は、いったいどこを探せば手に入るんだろう。

あのソープ・ディッシュとアスリちゃんみたいに、出会った瞬間に何か感じる相手なんて、俺にはいやしない。昨日といい今日といい、なんて寒々しいクリスマスなんだ。俺だっであつたまりたいんだ、くそ。

となればソープ・ディッシュにちよいと意地悪してやりたくなるのも、当然だよな？　アスリちゃんの近所をうるついで、偶然でも装ってみようか。

考えだすと楽しくなってきた、俺はその夜、とりあえずの潤滑油にさよならを言った。

それを伝えたらあの懐中時計はほっとするか呆れるか、さてさて。

4・金鎖

4・金鎖 純白でいられんのは、見てるあいだけななさ

黙って脱け出しちまおうって算段は、懐中時計を収めた手のひらの向こうに見えたチェインベルトで、失敗に終わったのを悟った。レザーパンツと財布をつないでいるごっついチェインは、カウントダウン・パーティーの幹事の持ちもんだ。無造作につけてあるシルバーのクロスチャーム。これはアンティークなのと囁きつつすり寄られ、以来半径五メートルには近づくまいと決めてたつてのに。うかつだ。

「あらあ？ ルイちゃん、帰っちゃうのお？ カウントダウンはこれからなのよ、お祝いしましょうよ」

男は今のところ管轄外だ。案の定尻に伸びてきた手を払いのける。「あいにく、喪中なんでね」

「んまつ、その言い訳気に入ったわ。でもどうせ女のところへ行くんでしょ」

「まあな」

「きいつ、くやしい。ルイちゃんを落とせなかったのが唯一、今年のみ残りしよ。来年こそ見てらっしゃい」

決めポーズのつもりらしい斜め目線が絡んできた。眉やら耳やら唇やら、あちこちのボディピアスが好戦的にキラキラ光る。

勘弁してくれ。

男の俺から見てもこいつはいい男なのだが、ターゲットにされんのはごめんだ。脇をすり抜けようとしたものの、がしりと腕をつかまれてしまう。誇張するような服を着ているがその筋肉はダテじゃないようで、ふりほどけない。

「懐中時計持って遁走なんて、アリスの白うさぎみたいね。せめて

来年の抱負くらい教えてつてちょうだいな」

抱負つてのは、自分の中に抱き、負っているからこそ抱負なのさ。口から外へ出したとたんに酸化して、陳腐に、上っ面だけになる気がするの俺だけか。

だが、ここでぐずぐず引き止められたくもない。諦めて、ため息に乗せて教えてやった。

「プリンス・アルバート」

男は、きゃっなんて喜んで身をくねらせている。その隙に腕の自由を奪還した。

「アソコへのピアスね？ いいわあ、おそろいにしない？ それとも、食べさせてくれる？」

「金無垢ならね」

どうにかクラブを後にして、女のもとへと向かう。

「アルバート公の御名で第一に導かれる答えが男性器のピアスとは、何たることだ。ヴィクトリア女王陛下の夫君であり従弟であるとする者は、この国にはいないのかね」

ポケットから暗然とした悲嘆を漏らすのは言わずもがな、ティソの懐中時計だ。

「懐中時計の鎖のスタイルだなんて教えてるあいだに襲われたら、たまんねっすよ」

こいつに教わらなければ俺だつて、アルバートなんぞ知らないまま一生を終えただろう。別にそれで困りやしないんだ。

けどあの事件が起きて、こいつがしゃべりだして、鎖を追いかけることになって。とてもじゃねえが今年は、連中とお祭り騒ぎする気分じゃないのさ。

「あの男は信じようとしてもしていなかったが……先刻の君の言葉は真実だった。礼を言おう」

このテイソの懐中時計には鎖がない。通常、懐中時計つてもんは鎖をつなぎ、ベストのボタンホールやへりに留めて落下を防ぐ。

だがこいつは決して、鎖につながられようとしななんだ。ただ一本を除いてはね。だからそのままジーンズのポケットに突っ込まれても、渋々我慢してやがるんだ。

ロシアの貴族はこの時計のためにアルバートタイプの特別な鎖を作らせた。フォブ、つてのは印籠の根付みたいなもんだな、そこには家紋をあしらい、でかい宝石を埋め込んだ金無垢だったらしいぜ。ところが貴族が没落して懐中時計を手放すとき、金鎖と一緒じゃあまりに値が張るもんだから、別々に売り払っちゃまった。以来このテイソの懐中時計は分かれたれた金鎖を我が家族と呼んで、探し続けているんだとさ。

ま、そうは言っても手も足もない懐中時計に出来ることなんて、人のいいアンティーク・ショップ経営者でもつかまえて、自分の代わりに探させることくらいなもんだ。それが運悪くうちの両親だったってわけ。

「別に礼を言う必要なんてないです。俺は親父が命の瀬戸際にかばったもんを粗末にしたせいで、化けて出てこられるのが面倒なだけっすからね」

「私の金鎖が、君と君の父親たる私の親友を結び付けているなら繫索を使命とする鎖として、それに勝る光栄はあるまい」

女の部屋には明かりがついていた。懐中時計を引っ張り出して時刻を確認する。

十二時前だ、間に合った。

ちらちら雪が降り始めていた。雪つてのは幻想みたいなもんだ。素手でさわったとたんにぐずぐずに溶けてまわりつくから、払いのけたくなっちゃう。女つてのも、たいていはそうだ。

純白でいられんのは、見てるあいだけなのだ。

そういや不思議の国のアリスに出てきた白うさぎ。挿絵じゃ使ってんのはアルバート鎖だ、なんて言われてんな。

「懐中時計の鎖にアルバート公の名を与え、それをこぞって使いたがったのは、洒落者のプリンスご愛用のスタイルだったから」というのは建前のように思うのだよ、ルイ」

「そうっすか。じゃあ、本音は？」

部屋の鍵は持つてる。それを鍵穴に差し込んだ。

「世の紳士たちが、ヴィクトリア女王陛下にプロポーズさせた貴公子にあやかりたかったから、というのはどうだね」

「あなたにしちゃ夢のない話っすね」

「女王陛下に求婚することは許されていなかった。真相はそれだけの話だが、ルイ。女王陛下をひざまずかせるのが当時の貴族たちの禁断の夢だったのかもしれないぞ」

軽口を叩いてやがる。機嫌がいいんだろう。俺がこの部屋に住む女と新年を迎えようと、柄にもなくダツシユなんぞしたから。

「そりゃいいっすね。ひざまずいて、俺のアルバートをなめてくれんなら」

「故意に話を逸らそうとするのは良くない癖だぞ、ルイ」

「ことあるごとに説教する癖よりマシなんじゃないっすか？」

ドアの音に気づいたか、奥からゆったりと女が姿を見せた。クラブのカウントダウン・パーティーじゃ絶対に手に入らない安堵感は、雪より静かに降ってきて、雪より確かに降り積もる。

「うーっす。ただいま、ばあちゃん」

5・金繕

5・金繕 さあさあおいで、ベルを結んであげるから

カウベルをつけ損ねていた相手が、みずから首を差し出してきた。クリスマス前にスープ・ディッシュを買っていったおねーさん、アスリちゃんが見るからに困った顔をしてドアを入ってきたとき、俺は内心のにんまりが表に出ないよう念入りに装った。

「いらつしやいませー」

「こんにちは」

じつ、と窺うような視線だ。話しかけるか迷ってるな。スープ・ディッシュを買ってから、バスルームで人の声がするようになったんです……って相談とか？

アスリちゃんはうろろうろと店内を歩き回り、首をかしげ、ディスプレイを覗き込み、迷える子羊……いや子牛と化している。

さあさあおいで、アスリちゃん。ベルを結んであげるから。

「あのう」

待つことしばし。アスリちゃんはようやく意を決したように、つかつかとやって来た。俺は急がず慌てず、はい？ なんて気さくな笑顔を作ってみせる。

「きれいに修繕された陶磁器があるって聞いたんですけど、どれですか？」

ふうん、聞いてきたと。誰に？ ばあちゃんなら現物を見せながら話すはずだから、消去法でスープ・ディッシュか。ってことは、ばあちゃんの予言どおり、アンティークの精霊とおねーさんは何とかうまくやってるってわけだ。

そりゃ、ちよいとつままない展開。

「修繕された陶磁器っすか……」

「……売れちゃいました？」

考え込むような素振りをしてみせると、腹の減った子犬がすぐるような視線が返ってきた。いいね。お願い、と言わせ甲斐のある夕イブだ。

「いや、あれのことかな……」

「あるんですか？」

じらしてみる。アスリちゃん、ぐっと顔を近づけてくる。ますますいい。

「でもさつき見たのに素通りしてたから、違うのかなーと」

さりげなく動向を見守ってたことをアピール。

「えっ、どれですか？ お願いします、見せてください」

そわそわすりすり両手のひらをすり合わせた格好で拝まれた。ようし、お願いと言ったな。いい子にはごほうびあげなきゃね。

商品のあいだを縫って案内し、それを示す。大きなアスリちゃんの瞳が一段と見開かれた。

「ええっ？ これのどこが……」

「ここらへん全部っすよ。金繕いって技法っすね」

江戸時代の、二彩唐津の鉢。割れてるのをばあちゃんが骨董市で仕入れてきて、知り合いの工房に修繕させたやつだ。

ま、そんなことどうでもいい。アスリちゃんにとってはどうやら、修繕されてるってところがポイントらしいからな。

「これ、こういう模様なんじゃないんですか？」

鉢はホールのケーキから一人分を切り分けたみたいに割れていた。漆で破片を継ぎ、足りない部分は埋め、金粉を蒔く。さらに金地の上へ模様を描いてあって、まるで最初から豪華な金時絵が施されていたかのようだ。

「金繕いする前のを見てるから、間違いないっす」

「へえ……割れてたなんて信じられない」

鼻がその金繕いに付きそうなくらいしげしげと眺めるアスリちゃん、その腕に通された紙袋の中身がちらりと見えた。

「ありや陶器の破片か？ 柄からするとヨーロッパ製、花瓶かなんか。ふうん、割つちまつたんだな。それで繕いもんの陶磁器なんぞを見に来たと、そういうわけか。」

「焼きもんは、ソゲとかニユウとか……欠けたりひびが入ったりしたら、それでおしまいってわけじゃないんすよ。日本の場合は特に「そうなんですか？」

振り返ったアスリちゃんの前には、はっきりと教えてくださいと書いてある。まあま、急ぎなさんな。

「この鉢なんか、金繕いしてあるほうが味があるとまで俺は思いますね」

さて、ここらでテイソ懐中時計の、覚えても仕方ないのに覚えちまつた知識開陳コーナーといきますか。

「益田鈍翁つてのがいて、三井物産の設立者で古美術のコレクターなんすけど、稀代の数寄者なんて言われてるんすよ」

そこで二彩唐津の鉢を示す。

「これは共継ぎつつつて、欠けたとこをそいつ自身の破片で継いである。そうじゃなくて、似たようなまつたく別の破片を持ってきて継ぐのを、呼び継ぎっていうんです」

おお、いいね。アスリちゃんの瞳に尊敬の色が加わり始めた。

「その益田鈍翁は『東海道』つて銘の茶碗を作らせたんすよ。東海道といえは五十三次つしょ？ その茶碗は『次』と『継』をひっかけて、五十三もありそうな大量の陶片を呼び継ぎして、一個の茶碗に仕立ててあるんすよ」

「えーっ、すごい！ おもしろいですね」

「数寄者つつつのは茶道をやる人つすけど、風流なヤツつて意味もあって……つまりその風流なヤツが、わざわざ割れまくった茶碗を作ったわけ。玉にキズ、つてのは違うんすよ。キズがアートにもな

「つちまう国なんすよ、日本ってのは」

アスリちゃんはすっかり感激してくれちゃったらしい。金繕いの二彩唐津が欲しくなったのか、値段を見て唖ったりしている。

「金繕いとまでいかなかったも、陶器を継ぐってのはちよいとコツがあるんすよ？」

どつきりさせてやった。

「ど、どんな？」

「破片に接着剤をつけてから継ぐんじゃないで、継いで押さえ込んでから、接着剤を継ぎ目に埋めていくとか」

「そうなんですか！」

メモしはじめそうな、熱心な勢いでうなずいている。いい生徒になりそうだ。ベッドでもこの調子か、ぜひ確かめてみたいね。

「大事なもんなんじゃないっすか？ 知り合いの工房に安く直してもらいますよ、それ」

と言つて紙袋を指差す。アスリちゃんはぽかーんと口を開いた。エスパーを見る目だ。

「あれ、違いました？」

などと、わざとトボけてみせる。

「いえ、違います！ でも、どうして分かったのかと思って」

「ここだけの話、テレパシーっす」

お、半分信じてるっばい。素直なおねーさんをからかうのは楽しいもんだ。

「ですけど、あの……おいくらくらい、かかるんでしょっ？」

「そつつすね……」

よっしやきたあ、と頭の中で叫ぶが、外面はあくまでも紳士的に金繕いすることは忘れやしないさ。

「一杯おごってもらえたら、それでいいっすよ」

「え……？」

ずっと静かだったジーンズのポケットから、小さなため息が聞こえた。

6・執着

6・執着……なら、俺を試着してみる？

「男の人って通販のお洋服みたい。気に入って取り寄せたのに、手にしてみると思い通りの色じゃない。だからって返品しても、気まぐずさばかりが残るの」

「……なら、俺を試着してみる？」

あの時までには、事は思い通りに運んでいた。

アスリちゃんは彼氏と喧嘩してきた直後。スープ・ディッシュの精霊の話をしゃべっちゃまって、アタマを疑われたらしい。まあ妥当な判断だね、普通なら。

その彼氏からもらったのに割つちまったらしい小物入れ。継いでやったのを渡すために会ったわけだが、その恋のほうにもヒビが入ってた、とそういうわけだ。

泣きながら飲む酒ほど回りの早いものはない。酔っ払ったアスリちゃんを部屋まで送って、さあこれからってとこだった。

帰さないって言わせるまで、帰らないよ。

そう口先まで出しかけたところで、テイソの懐中時計が鳴りだす、スープ・ディッシュが暴れだす、ぶち壊しだ。冗談で片付けられたうえに、警戒心ゼロのままコーヒーまですすめられちまった。

まあいいさ。忘れた振りして懐中時計を置き去りにしてきてやったから、近いうちに届けに来てもらえるはずだ。メシでも食いに行こう、デザートはもちろんアスリちゃん、コーヒー付きでね。ミルクは俺が入れてやる。

と思っていたら。

アスリちゃんはスープ・ディッシュまで持ってきやがった。

理由を聞いたですなんて無粋なことはいしなさい。

売りに来た本人だって納得いってないのは、名残惜しそうな指先が雄弁に語ってるからね。

「お店に戻してください、申し訳ありませんって言ったきり、しゃべってくれなくなっちゃったの」

はいはい、ティッシュをあげようね。マスカラが流れるよ。

「お金なんていりません。ほんとは売りたいくないんだもん。だけど、せっけん置きくんがそう言うんだから仕方ないでしょう?」

売りに来るとして金はいらなくて拒絶されてもね、困るの俺なんだけど。

「じゃあ委託販売ってことにしますよ」

ありがとう、と頷くアスリちゃんに笑みはひとかけらもない。彼氏と喧嘩してきた時より格段にこたえてんな。あの時はまだ怒る元気が残ってた。

さあどうしようか。

アスリちゃんじゃなくて、ソープ・ティッシュを。

俺が売ったものの中で、初の返品。理由が何であれこんな風に泥を塗られちゃ、黙ってるわけにはいかないね。

「あのさあ、アスリちゃん。週末にアンティーク市があるんで、ついてきてくださいよ」

「え……どうして?」

「決まってるじゃん。荷物持ちっす」

ぼかんとして、呆れて、それから目尻に涙を溜めたままアスリちゃんは笑った。

「あんまり戦力になれないけど、いい?」

「期待してんの、戦力じゃないからいいっすよ」

「ソープ・ディッシュは、極端に受け止めてしまったのかもしれん」
わざと置き忘れられた恨み言を垂れだすかと思えば、テイソの懐
中時計は憂慮を表明した。

「人間とモノとは、主従か友人までがあるべき姿だ。Grandfather's Clockのように、ウエディングベルを鳴らして祝福を与えるのも構わん。しかし恋人や夫婦にはなれんと諭したのだが」

ふうん、ソープ・ディッシュの家出はそこらへんが発端か。

「世の中には、生身の相手より手っ取り早く気持ち良くなれる道具つてのもあるんすよ？」

「ならばルイ、君がその道具ではなくアスリ嬢に執着する理由を弁解したまえ」

「アスリちゃんは道具よりも、いじめ甲斐がありそうだからつすよ」
ロシアの貴族が没落した時、真っ先に懐中時計を売り払った理由は、推測できないでもない。

喪失してからその価値に気づいて、失う前の自分に嫉妬したつて、時計の針は戻りも止まりもしない。その事実を見せつけられるからだ。

だがそれを無情だなどと恨むのは筋違いつてもんさ。そいつはただ、いつもと同じように忠実に仕事してるだけなんだからな。

たっぷり思い知ればいいのさ、ソープ・ディッシュ。苦い油が詰まっつて動けなくなつちまっつた歯車の気分、自分を置いて流れていく時のありきたりさをね。

モノは所詮モノなのか。ソープ・ディッシュの態度によっては、海の彼方に売り飛ばしてやる。

俺は両親の死を穢す答えを聞かされたくはないんだ。

7・ 出立

7・ 出立 つべこべ言わずに渡してもらおうか、俺は権利を手に入れた

あるところに、アンティーク・ショップを経営してる夫婦がおりましたとき。

夫婦は古くさい懐中時計の精霊になつかれて、長年そいつのために金鎖を探してやってた。時計と対で作られたのに別々に売り飛ばされちゃった、世界で一本しかない鎖をね。

ある日フランスの老舗宝飾店から連絡が入った。お探しの金鎖に酷似した品があるってんで、夫婦は飛行機に飛び乗って買いに行きたわけだ。

ところが到着して、さあご対面って時に店に強盗が入るなんて、なんとも運の悪い話だよな。強盗は客も店員も片っ端から射殺しまった。

意気揚々と強盗が店のもんをさらうあいだ、息のあった店員が、金鎖を見に来た客の末期の言葉を聞いていた。客は胸ポケットの懐中時計に向かって、こう言ったんだとき 君が無事で何よりだ、親友をかばって死ぬのなら、きつと息子も許してくれる。

人と精霊が人とモノ以上の関係になれないんなら、夫婦は無駄死にしたことになるのさ。

「ルイ。今日もお値段を見て、ソープ・ディッシュを諦めたお客様がいましたよ。呆れておっしゃるには、これじゃまるで金メッキの価格だって」

ヘレンドのカップに紅茶を注ぎながら、ばあちゃんが何気なく言います。満たされていくティーカップはヴィクトリア・ブーケ、ヴィクトリア女王が愛用した絵柄。

テイソの懐中時計のためにしつらえられた鎖、そのスタイルはアルバート。名の由来となったプリンス・アルバート公はヴィクトリア女王の旦那。

世界はどっかで繋がってる。ただその連鎖が目に触れずに終わることもしばしば。

「ルイは、ソープ・ドイツシュに売ってもらいたくないんだねえ」

「まさか。委託販売の手数料、そんならい取ってもいいと思っただけ」

「まあまあ、ずいぶんなしっかりさんだ」

ばあちゃんは心得てる。俺がつけたとんでもない値札を直そうともしない。そうさ、売れたりしちや迷惑なんだよ。煮え切らない結末の尻拭いはごめんだね。

アスリちゃんのご来店は、待つのがそろそろ苛立たしくなってきた頃だった。

「いらっしやいませー、うちで不良資産を委託販売してるアスリさん」

「ドイツシュくんをそんな風に言わないで……」

思いつめた表情はいい知らせだ。

何回かデートしてみたけど、アスリちゃんはソープ・ドイツシュに関してただの一度も触れてきたことがなかった。その頑なな黙秘が、むしろ雄弁に未練を語るってもんだ。とうとうそのケリをつけにきたってわけだな。

アスリちゃんは涙ながらに、ソープ・ドイツシュへの想いを訴えたりしちやってる。

「アンティークに精霊がいるなんて本気で思ってたんですか？」

いじめ納めかもしれないから、存分に煽っておかなきゃね。

「いるとして、そいつと恋愛なんてできると思ってるんですか？ 相

手はモノつすよ？ 目に見えない精霊つすよ？」

「でも心を持つてるの！ ヒトの形でもモノの形でも、中にあるものは一緒だった」

魂を瞳から覗かせて、行き着いた真理を叫びにのせて、アスリちゃんは今が聞きたかったことを聞かせてくれた。

サンクス、アスリちゃん。あんたやっぱ、いい子だったよ。

もう返品は勘弁してくれよ？

ウンザリするようなガキくさい愛の確認なんぞして、ソープ・デイツシュとアスリちゃんは帰っていった。コロナとドアベルが出立を告げる。俺印のカウベルはつけ損ねたが、気分は悪くない。

「すまないことをした。私は親友などと口にしながら、結局は一線を引いていたのかもしれない」

さてあいにくこっちの精霊は、まだカタが付いてない。テイソの懐中時計は苦笑混じりで嘆息してるが、嘆きたいのはこっちだ。

「君も、わざわざ一線を引きたがる癖を直したまえ」

引き換えに、余計なおせっかいはする癖をやめてくれんならね。

「手数料、儲け損ねたつすねえ」

「ひねた振りをするのも改めたまえ」

とにかく一仕事ケリがついた。休憩がてらラップトップを引き寄せ、シヨップ宛の到着メールをチェックする。未開封の中に一通、英語の件名を見つけた。Re: Inquiry about the watch chain。アメリカの宝飾時計専門店からの返信。

申し訳ございませんが、お探しの品は当店では取り扱っておりません。

英語で、ドイツ語で、フランス語で、その一文だけは正確に綴れるくらい見せつけられてきた。Unfortunately we

don't have any informationだの、
We do not offerだの、ずらずら勿体つける割に申
し訳なさなんてこれっぽっちも伝わってこない文章で。

期待もなしに開いたメールは、やけに白かった。そこにはただ一
言 It's here .

「都合よく耳が遠くなるのもいい加減にしたまえ」

客の問い合わせに対してRe:で返す怠慢な、ビジネス文書とし
て当然のThank you for your inquiry .
もないフザけたメール。だがそれは、「ここにある」と明確に伝え
てきている。

「ばあちゃん悪い、店番頼む！」

邪魔な椅子を蹴飛ばしながら、奥へ怒鳴る。

「はいはい。出かけるの？」

「あー、ちよいとアメリカまでね」

とあるアンティーク・ショップの経営者夫婦がやり残した、最後
の買い付け。夫婦の鼻先をかすめて消えた金の鎖。

両親が命と引き換えた友情に、俺自身がずっと納得できなかった。
俺と両親を繋ぐ鎖は、そのために理不尽な絶たれ方をしたと思っ
ていた。今日までは。迷っていた。

中にあるものは一緒だ、その言葉が俺の背を押す。

世界はどっかで繋がってる。ただその連鎖が目に触れずに終わる
こともしばしば。だが俺は今から、そいつを形に変えに行く。

価値を知らない者に、正しい対価を受け取る権利はないんだ。

つべこべ言わずに渡してもらおうか、俺は権利を手に入れた。そ
の鎖は金無垢以上に価値がある。

7・出立(後書き)

この後のルイの続編『Mile Zero』掲載予定してます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1105v/>

Soap Dish

2011年7月23日02時23分発行